

清暇錄

大正九年十月下浣起筆

特別
イ4
1919
332





清暇録一

大正九年十月廿九日起筆

小精舎主人手録

の今も方知と海り西川如見の萬物怪異并断
 ハ冊を購ふ正徳跋こ天変地異其他を考こつき
 不可解の古一と記す由こ後叙しつものうそ今よ
 り見んば幼穉のものさんともあつたのちとて見んば
 聊の味あり我邦文の先記者の著いす不
 るハ架中しをなすも一也此方より時今あつた獲ら
 じきよの也外東江源録と烏石の書とこ吉き
 こ唐詩選各三冊を購ひこれを法帖と併めて

向家は、前より名子のこゝの和法帖とよぶおとつて横
書し、唐草の中をうゑんと、堂を畫す處の唐花は、遠く
り、或る詩を補ふも、其の意も、古くをうゑ、ふも便
り、東江のそと、舟の舟も、鳥石の、寶曆殿の、あむと
相照し、るゝふあひの、具つち、とせむ也 十月廿六日
○寸帖ニ冊、此年、京都、都、
の城、
と書せんことを、
あり、
いへ上様せんと思し、
し、
と書せんことを、
あり、
いへ上様せんと思し、
し、
と書せんことを、
あり、
いへ上様せんと思し、
し、

と、
あ、
○今日、
陳在專の、
起州、
と、
お、
陶集の、
と、
ハ北、

と、
あ、
○今日、
陳在專の、
起州、
と、
お、
陶集の、
と、
ハ北、

日と印説二十條を附す、記れ移すも同じく印説
ありともあり同じく、卷首に錢陳犀、陸芝
張維岳の序あり、卷尾に自叙あり、乾隆二十五年
庚辰十二月と説あり、張維岳の序に凡そ此の
印を張の囑に成して作りしものと見ゆ、秋分
園と云ふは張の堂號、未詳、各印の下に真字
の注を刻す、每紙二方乃至三方を捺す、印式方圓を
專取し他の式を取らば、昨夜燭を剔つて既説
名畫の環の間に居るの思あり、伏ふ不可、此年
印説と校ふするも個の如きもの當りて違ふも
亦不の印説考略より此の考あり、故に一説
を注するものと見ゆ、架中りの珠と為すは是る

大正九年十月三十日録

陳西庵印説の終に不可刻説を載す曰く

琴有不彈印亦有不刻石不注不刻象不配不刻
義不雅不刻器不利不刻異不利不刻疾風暴而
烈暑祁寒不刻對不敬者不刻不潔者不刻
此所謂八不刻又有不可刻者五不物法不可刻
不通文義不可刻不精篆學不可刻筆不信心
不可刻刀不信筆不可刻有志斯道者不可不
慎典

西庵の序の終りにて此をんたること存中りあり
以上の二印西庵の兄後の一語を凡そべき歎
○有印と通推對此の二也を合刻して一冊を得

天保年分伊勢方の宇津益夫の様によす也。有志録を
林和靖の著す所と某根譚風の後録也。母後
去短錫線すと云ふは皆馬味あり。余寸本を甘恵する
折此の方の寸本無きやと討治するも終に得る能はず
此書と眉公秘笈と載する所にて單行のものを
やむやと知れず。あに我邦に刑本も單行刊本も
と名やゆゆの寸本にありきもの也。刊者も此書
附するは漁樵問を以てし。能く選を
以り此書と即原節の著すもの也。漁樵問
各都府の尤も詳なるもの也。これに言を寸本
に欲しと云ふものも無し。折を得て自言わ物
の架中にて置えん歎

(十月三十日)

○秋分圖印譜記略：ようあふの印譜政略に無し
と記せしが、今政略を捨すも載録しあり。陳在者
三種印譜の一一として最古早く取つてしもの也。
こゝに掲げ前掲記をも正すとす。
○野泉帖初掲を石入を婚のこゝ森川井
末の浪委帖とせし。此より一、野泉帖と
と古文書初巻の帖を主に載せもあつた。同
書にあり。昔も跋の表紙にもあるも美なる
の繁漢に余既に浪委帖と名を付し。初掲
と名し野泉帖の字より入るるを載せし
又幸に初巻末の四帖を婚のこゝを
こゝに載ふへし。此書と今日も稀観

のいふに属す

(十月二十の録)

右所一うも更なる空糸帳の首端に載せる村
田其のいふを聞まん森川村空の様と上ほせれ
るもあはれが村空と北の上梓に進了校合をな
しつるもまして流形城之あや侍従大政にあり
し頃十田印敷に命して附近の文者を授けし
道と申し心りしものなることを知る得る現に
北帳の空座うもあやを家々列其の載れろ
ある、空糸と帳を命ししをまづして、七との
ころをあま人ぞくむといふ古語にありたるより
又るあり、北帳にぬめたる古文者を南北相前後の
のいふは豊公(比叟)の七のころと撰(撰)伴(伴)座(座)中(中)の

しつものあとも多し、十卷尾の二休の大字を
めら

〇寸本千種を蒐集し其結果を記さん、所謂の古版と云
ふものや、字々々々、勿論和紙のものと五山及古来の古
版といふものも存在するもの稀なり、そのまじり合は
るべき時代と寸本の絶無、
通らずとも多々傳へたるものあり、その傳へるを記さん
ある、今も強う古版を得んと企つものあり、ある、
しゆき紙のいふもの、何となく、其を記さん、
比叟とや、古き版をと採する、勿論空糸の無けんが
古版といふと願ひするもの、中二巻の物あり、
そのいふ空糸の空糸係え又その年種、刻しある

七の
例くハ林尾山の春鑑也。又年刊の詩歌押韻
和漢年表や「取次合韻」等の類々誰か知つて居るもの
であらふ寸を部類の内せと古版と云ひ給ふらぬか、この
考とよして時代々々版七拙々々刻も扱ふものもある云
ひ寸珍を、恰今の故味也無い寸珍をと云ふか、似て云
ふ氣の利いた小形おるや、あも、以上下の欄廊を
七浦和と要すともあるもの、例くハ春鑑也ともいふ形に
とある、字も不おるに大き々、上下の紛向もあつて通つて作
裁をうてそをぬ寸珍也。と云ふ故味を之もいふ
るけん、無器用時代の製心とてと無理もさう、寧ろ時代の
味の之れ第一とあるもの、何んとその名も日本の製版
と比較的、此世のものをいふ、宋之版、其代支那版と云ふ刻

す、こゝを別比が、日本に獨主の必り、此の體裁も、故つ
比の、菱湖系に、其系統の版下あつて、
遊風の版、出来比の、ある、昔のや、押漢、
う、浦子よき、あ物と、心り、出し、比、
前のと、扱、と、扱、あ、別、
と、取、除、ま、あ、の、大、体、不、体、裁、
や、沈、筆、を、澤、め、
と、あ、る、此、今、專、ら、此、行、の、もの、と、扱、
十月廿二日
の、杜、希、又、沈、筆、中、
の、も、あ、る、故、の、取、つ、
佳、の、考、也、と、ある、を、又、
踏、ひ、入、る、や、
踏、ひ、入、る、や、
踏、ひ、入、る、や、

七巻と正續二巻あり上様さるものなり
竹七正續寸法同じしとぬとぬを今も得し
初楊と正續と併せし寸法も併せし
一巻四冊を也。續之巻を大橋初巻の千紙と
るものなり。二冊の尾は天保丑八月函山末が
実金に後うとありし初巻主人の後款あり通巻
朱筆なり二ニ本あり。外に徳勝天保初六冊
ふも不可なり。外に徳勝天保初六冊あり
一冊を踏の、これを富士谷成章が一人に授けし
るものなり。徳勝の手にしものなり。是れ
しく天保初を説きしものなり。是れ成章

の先汝子の漢文のなかり、架中一本無きものなり
也とす 十月三日記

○近江の安土城遺址探検に出かけた西村真次氏と
津在十の洞つらへ帰来今の功其の結果を大略
の事なかり、此の探検の才一の成即もその事な
天守閣の礎石を引掘し得たことなり、これをこ
れは何人七企及し得たかといふ事見寺に保
存せんある所の古圖を修り受け得た、その事
と相照し指路。此の圖は誤りあることを知るの
研究も正誤し得たことと別と別是し。其の圖
を出して示す、徳見寺の一旦田縁の尖に罹る位地の
の如くす。燒久を免えん塔を田圃に築き

と寺の地形果すも、福して地形変りたりと云ふ之の七回
と就して説めを考へ、此寺と四心寺の寺の由を説き
前の寺の園と心寺に存する由其字をも持内りり
焼亡を免れえたる塔の聖蹟と謂ふべきものとも
安土城より塗塗の瓦を用ひたるとの伝説と云ふ傳
と云ふ、現に塗塗の瓦片二三を掘出し得たりと云ふ、又寺
に依りて古園と云ふ種あり、武將の邸跡と傳へ
る記さるあり、秀吉の邸もあり、殊に目立て居り
る森井某丸の邸が信長の親族信澄の邸と傳り
城と最も福地なる地位なるあり、信長の信託
を得たりし消息もおのゝ、信長者取りせり、信長の
あとの又寺も寺并に附近の田家、信長の

聖城の論の書傳七略、推し得べしと云ふ

寺に早稲田出張部、日本國史を出さんとす
こゝより西村と其のあり部分を撰出し試みる、安土
城経をのこし、信長と主として、信長の安土研究に
一種の興味を感じ、是れ徹庵の研究と遂に
人々のと此方と云ふこと、信長出張すること、ま
なり、余も彼の志を悟りけんと、出張費二万円
を、信長出張部より出すこと、信長轉旋し、さてこ
と、信長後未史家の念をせし、信長事をも合て、且つ徹庵
とまひ、信長ハ別々、信長未常名の深さ、信長研
究と遂ぐるを得たり、信長総見寺の松を、信長
深く彼の地の名を、信長こび貴を、信長の山を、信長

すを文まきり、飽む助けを研定と成孰せし
めんと拙言ひしよし
(十月三日記)

○書肆、田中良庵の印譜四五冊を賜り見し、甚りす
一夕其序を讀み、此人安永天の頃の刻者なる南の
の名乎也、此彦根迄のよりの、其の印譜あり、不を
見らざる、彦根迄の印中刻者多きを認め、而
て驚くべき事あり、多心あり、こと也、彼人、う序
於て自ら教へ、所、授ひ、五葉、歎と述す、と云
印人中式をむり、多心の人なり、今左、序の二部
を物し、印人傳の資料、と云ふ

余夙好篆、刻者若、高子雲、賦印譜、文選、凡賦、印
譜、唐子選、春江花月夜、印譜、自珍、印譜、等、既

行于世、吳、爾後、自、安永四年乙未、春、立志、拙言、欲、刻、印
萬、歎、既、而、竊、謂、彼、今日、彫、月、刻、以、應、於、四、方、之、需
而、窮、於、終、身、之、日、恐、難、得、滿、其、數、而已、尋、至、於、天、命
改、元、之、冬、中、旬、七、年、萬、歎、既、滿、矣、而、余、歎、未、至、四、旬
眼、力、尚、未、至、衰、既、則、因、欲、復、刻、於、萬、歎、自、曰、二、年
壬、寅、春、至、同、丑、年、丙、午、之、冬、萬、歎、又、滿、矣、余、因、懷、所
以、其、狀、故、自、立、志、試、刀、應、治、寒、需、雖、無、而、信、然、而、何
以、如、此、治、去、云、之、人、衆、而、終、印、遂、業、之、速、焉、乎、蓋、以、江、都
皇、和、大、都、舍、而、其、官、庶、輻、輳、之、廣、博、寔、非、他、州、所、比
也、犬、馬、之、齒、既、至、不、忘、之、年、因、又、竊、謂、嘗、以、為、難、矣
一、生、恐、不、得、滿、於、萬、歎、之、數、也、不、圖、病、即、於、滿、也
是、不、果、胸、次、則、終、身、之、切、豈、不、可、悲、乎、歎、哉、於是

自同下未春夜食之飯手不遺刀所刻改至於五午穀也云

○頃日獲たる秋分園印譜の題簽より上冊より又何
う書しあり、購入の時氣味は付いたるものなり
か、清祝す
ぬハ張井未の題簽也道光庚午年井未題とあり
リ迂濟と刻しある印を捺せり、此張井未と近世著名の
是名家也、此人の題簽あり或はその年清を記す
ともすべく一層の珍を矣ふ

十一月五日記

○作海真中書社司真木山香次氏訪余に衆議院
議員時代因宮社及び他往來書を四巻と清人と
由年努力せる田邊結果漸やく相商し遺業成り
ることを報じし、四巻の補助は今も得る能はざる

宮附書を清り得たり、七巻の題簽し、務定の遺業ハ
か通り成就を物語ると云ふ、此等の話をききうり
るに、
早く物者の抄伊藤忠義の物語に二年清海を清め
存存する所、天冠の御遺書天冠を京都へ送し
なるを、清りし、其木山と記するを知らぬ、
へし、天冠のありし、其木山の由を
有る親しむりし、其の母を、天冠の物語を
清りし、其の母を、天冠の物語を、
七のくし、四方に探取垂下し、珠玉を鑑し、
然目と奪ふ、其の母を、其の母を、
を離れ、其の母を、朝廷も無いと云ふ、
ゆゑ、其木山又、其の母を、

の大冠に拵入るる二三の珠玉を伊勢(正)冠の心玉に取
てて敬供し今思召(正)しとあると云り九七長(正)の
二、伊勢の(正)流(正)り記を関(正)る(正)確(正)ら(正)ん(正)あ(正)る(正)京(正)都(正)
より(正)な(正)る(正)あ(正)る(正)る(正)拵(正)入(正)り(正)珠(正)玉(正)さ(正)ら(正)ぬ(正)の(正)敬(正)供(正)す(正)ら(正)し
と(正)思(正)召(正)す(正)惟(正)に(正)ま(正)か(正)ら(正)ぬ(正)と(正)記(正)す(正)る(正)と(正)記(正)す(正)る(正)と(正)記(正)す(正)る(正)
十月五日記

○今(正)は(正)八(正)朔(正)其(正)功(正)者(正)的(正)詠(正)し(正)と(正)云(正)え(正)ん(正)と(正)偶(正)と(正)あ(正)る(正)
~~用(正)行(正)者(正)の(正)十(正)八(正)日(正)に(正)今(正)二(正)を(正>出(正>し(正>田(正>行(正>る(正>と(正>
七(正)日(正)に(正>其(正>の(正>一(正>句(正>を(正>書(正>き(正>き(正>詞(正>を(正>書(正>き(正>き(正>
牙(正)の(正>平(正)儀(正>の(正>内(正>に(正>ま(正>さ(正)せ(正>た(正>所(正>謂(正)用(正>意(正>と(正>す(正>と(正>
き(正>今(正>二(正>を(正>し(正>と(正>あり(正>、(正>田(正>上(正>記(正)~~

み、つくの

傘

か、とと

ま、く

時、初、心

○文音者の乃也に物を以つて曆を以つて例と倣ふに物
を以つて経を以り乃もものとの散葉や其葉を底よ
り得る、いつ日の物つおぬるもんと、よむて印標
を致向に寧ろ味あり、故に法して此のよ
るあつた悲しくる事、中、後日、の代あらん
はよのす、尺、聖、寸、短、は、物、を、中、の、よ、を
ん、と、治、又、お、ん、を、也、成、也、(曰上記)

○酒を解き、る人余、酒を禁せよと云ふ、余書
ま、酒を余、の、命、を、禁、する、能、つ、か、然、ん、を
進、り、分、量、を、減、す、ん、き、を、以、つ、て、答、め、余、つ、か、物
を、と、出、さ、し、命、を、回、す、の、所、を、ん、も、此、の、を
名、赤、酒、の、上、る、稱、ん、を、あ、と、お、し、兎、角、精、を

れ、而、一、を、酒、の、物、を、欲、す、而、(十一月五日)
○二、世、を、偶、然、新、集、交、男、奇、く、嫁、す、ま、次、し、統、納、の
取、換、り、を、終、る、吾、人、の、賜、や、男、奇、り、と、事、を、統、婚、手
續、を、履、む、経、路、中、吾、人、を、一、類、年、歳、を、一、ある、七、の、身
前、日、統、納、り、式、に、臨、み、先、方、を、し、送、る、に、あ、し、倒、親
の、あ、く、ま、者、全、身、を、受、納、者、を、認、め、つ、り、後、つ、て、是
方、の、名、の、上、に、符、を、脱、し、者、き、直、す、こと、一、画、ヤ、レ、く、と
一、款、を、も、た、し、凡、を、善、族、の、統、婚、す、と、宮、内、省、の、認、め、を
受、す、其、の、手、續、中、一、日、区、役、所、を、し、見、察、状、列、す、代
人、を、遣、り、し、何、れ、を、問、り、し、ん、ん、余、の、賦、金、状、態、を
問、問、す、也、云、く、宮、内、省、の、照、人、を、し、由、り、と、余、こ、こ、は
於、て、又、類、年、歳、一、番、を、宣、を、余、に、賦、金、一、七、を、し、を

宅七別在也株券の皆る嗣子並に子女の名義とあり
余の名義とありに其の株券若干あるのみ余實
を以て之を公而して職業に就くも出版業と云ふのみ
若し種々形式の之を拘泥せば余を恐らく男爵家と
結構するも余も合格せざるべし宮内省に此調書を得
て如何に演せんとするやこゝに於て余の再ハヤレク
の歎聲を來せ禁する能はざる也 (同上記)
○大橋訥庵平澤の拙書文法と唱る多夜寝後道
藝園を例とす、續々巻一蘇子内橋賢寺記に
きつる一節の教範に訥庵教言を録するを
んハ左の如し

今日讀此段不覺發汗即稱如蓋無一積之不實

景無一字之不迫真也此記謂之我函敬之記亦可笑
保丑八月十八訥庵を以て識於函嶽木質之定名
訥庵の函嶽訥庵此方を後記物と興味と感
し之も宜らう、平澤の味と此種の泡とある或
此文活潑未興味を感するものあり、今を左に二三
節と抄し後欄に備ふと云ふ

詩典文雖同源、而流派則別、猶文中、有論策有序記
各不同、若混而同之、乃為失體、趙鉛村談龍錄載
崑山吳脩齡之言曰、意喻之米、文則炊而為飯、詩則釀
而為酒、飯不爨米、酒則爨盡、噉飯則飽、酒則醉
醉則憂者以樂、喜者以悲、有不知其所以然者、如
凱風小弁之意、斷不可以文章之道、平直出之也、至

乎言也。

傳多んハ文間うらうらしく人を動うらうと論して四五の例を奉
く曰く

延陵葬子哀詞、寥寥數語、千載後使讀者酸鼻、哀
死之文何必在多也、周輝清波別志載、李觀六年清江
時、歐陽文忠公獲喪、歸太守請作祭文、曰昔孟軻聖
母之教也、今有子如軻、雖死何憾、而饗、守以簡率為
誣、觀曰、母深誣、而文忠至、擊乎、即稱之、又周亮工年雜
識別集載、劉會孟十六字祭文曰、公未何暮、公去何速、
嗚呼哀哉、江西無福、又朱彝尊靜志居詩話載、明
康陵南巡、將臨、靳文儘貴喪、詞臣撰祭文、均不稱旨、
御製文云、朕居東宮、先生為傅、朕登大寶、先生為輔、

朕今南遊、先生已矣、嗚呼哀哉、當時代言之、臣咸欽手
歎息、云、

文章任回の業を論して、清胡天游の後を考へ、
古今人皆死、唯此文章者不死、雖有聖賢、豈能

離文章、則其人皆死、

拙書評して、天游此文、雖不免有圭角、然論實
痛快、と

(十一月六日録)

○本の大隈印に於て、画家田中直(柳江)齋より、未だ印二顆
を見よ、蒙多りの刻する所、材依の所謂星形蟻と稱する、
鈕の四方に山の刻あり、雅緻極まり、刻者の題後二
方あり、外に張文菊の御修を刻し、張文菊未だ何
人なるかを詳しせず、或は之を張之洞の先代なりと、

大隈全嗣購此と欲し余に囑ふ余勸めて購へしめ且つ
磨つて私印とす莫大と注意す (十月七日)

満里舎輝



款云

嘉慶元年秋蒙泉以史鐵筆

似畫非畫其美不美既而視之見映方家山河憑
嘯傲詩酒作生涯

吳因作于蒙泉

石刻石の款識也別：張文若の論語を刻す
蒙泉外史工詩詞美出畫元精最刻筆
吾秀逸寫出群流所刻因章此其小松
蔣山堂齊名杭州稱為名家上追秦漢
討論金石極有根據平生事、泥落世人稱
藝林妙手矣

同流乙丑小除夕 子青張文萬拜後

○昨大隈帥に文的協会の大会を催す、偲て秋師を来
會するに事ありしを、テントの内に設けたる生座を充
し盛會と見たり、此大会を五年と一期とを以て行
本年を以て終了を告げんとし、更ら来年一月より
更ら一かか度と減人となすもの事、新以て維持會
員を募集せん為用意せる也、此の會より難澁なる五年
を無了に終了し、自視の意をも高し、此の會より
て五年前を顧み、今を困難状態に入らして已むる、五
年分の回者代を前納せしむる會費を募り、其の勢
金を以て五年の窮困を補給し、此の間に、此の間に
て改定大教起り物價暴落し、昂騰し、今を以て

の困難に遭遇し、若し之を以て、横空の企畫無
ん、今を以ての窮困を補給するに、幸に創立十年
を以て、記念會を大隈帥に開き、多くの有志者
會の経費を報い、贊助を仰ぎ、その功あり、再集
會費を助け、其の勢を以て、其の勢を以て、二
三の四五萬圓の資を得るを以て、今を以て、
これに、洋者を以て、之を以て、其の勢を以て、
時の研究を以て、大隈帥に、各方面の名流を以て、
へて大隈帥に、列七の状況、其の勢を以て、其の勢
の予備、其の勢を以て、其の勢を以て、其の勢を以て、
内して之を以て、其の勢を以て、其の勢を以て、其の勢を以て、
講演集を刊行する、其の勢を以て、其の勢を以て、其の勢を以て、

貴族を免るる利あり。但し國者の出納を利を以て
るを以て或許其の不足を填補し、茲に幸に五年
前納の金費を償ひ、今運も漸く盛況を呈するも
多し、此の五年の間は尤角不整頓ありし文の者
（今の歳をを免るるは其の概）を以て改革して其
内の株金を募り、事務の革心を固り、此の概漸
やく順境に赴きつてあり、此の間當余の苦心努力を
やうとせしむるは、最尤大隈會長が此會に興味を有るん
余の任畫を以て或多の便利を興くせんことを成功の大
なる原因と謂ふべきなり。時向茶話會を
稱して西洋初聲物りの名流を招き、其の談論を以
て、此の如き會の即と今場と一會長を以て一の聴

中者として以てこれを成功のしるすべし。此會の都
の智識階級約六百人、幸に當内を以て、毎會百
人の出席を見、是れ會以來十七回を重ね、漸々
今日此會のふるまはるる格を以て、殊味あり、蓋あることを
認め、一は、この如き會長に買ふ所なきもの例
とす、尚ほ、この附記を要するも、友人高井一の換位する
有る程、この東京に支店をつかす事、此の概今、この換位
と難し、余の困難は、種々の便利を得たること、此の概
より、如上（此の概）の困難と謂ふを打歸らざるは、此の概のた
より、此の任畫にあり、余亦、幹部を以て、其の期の終り
に歸るべし、人を自税の任無きことを得んや、今後の
任畫に就して、在来の事業を振興せんとして、此の概

か出来得可く八年度二萬圓におおむるに事業を振
張んと欲す、こんと為さるるに年額を五圓の庄入を
出す所を得る分あり二万を聞き可く大舎を二萬
さす本舎と實に此の募集あるなり二千年の
肥料を投し以て収穫を来年にも得んとす、二万の
分を得る敢て難るるにあらざるし、要に努力あり
耳

(十一月日記)

○十一月八日早稲田大学の維持員會に臨み二三重
の事と決す、その内に大舎格納及運動場内町
地購入の件あり、運動場境内は村道のありこと
略々も知れ、是より大舎の敷地内は道ありこと
とも自分永く大舎の所業に與らざらざること

より決し其の道あり今日問題とす、之れを町色
入の事を聞き、其の事も想ひたりし事あり
吉實、道ありあり、地回りも概なり、大
の敷地あり、道あり、大の格納敷地あり、大
今く初耳也、町色あり、今に格納地の道あり、大
んと申出で、大のあり、格納地の道を大の敷
坊内の分りあり、七、六、五、四、三、二、一、
とする提案あり、格納地の敷地あり、格納
町色あり、格納地あり、三十圓と、格納地あり、
三円を減し、二十七圓の敷地あり、格納地あり、
七、六、五、四、三、二、一、の支出を要することあり、
早稲田の町色あり、格納地あり、格納地あり、
の敷地あり、格納地あり、格納地あり、

え

日本政府発行佛貨國庫債券

五分利ヲ四分利ニ
乘換ル爲メニ及ル
高買買計算書

賣之部

一五分利佛貨國庫債券五百法券九九四枚(供託シタルモノ 四一〇枚)
此購入原價 五八四枚

一七五、七八九三〇〇(一枚平均一七五、八五〇)

此賣却代金 一八〇、二五七、〇〇〇(一枚平均一八一、三四五)

買之部

一四分利佛貨國庫債券五百法券九九四枚(前記五分利ト乘換ル爲メ)

此購入代金 九一、二九八、九〇〇(一枚九一、八五〇)

以上ハ大正九年十二月十五日高買買共受渡ヲナスモノトス

右ニ依ル利益ハ左ノ通り

一) 基金支出ノ節約額 八八、九五八、一〇〇

(二) 五分利券ノ高買買純益(高買買共裸値ニ換算シテノ計算)

一、三一九、八八〇 (利四トセバ約
一割三分ニナル)

備考、五分利付ハ大正十二年迄ニ隨時償還

四分利付ハ大正九年ヨリ大正十九年迄ニ隨時償還

五百法券額面日貨換算 一九三、七九〇ニシテ

此換算率ハ爲替変動ノ影響音ヲ受ケズ

以上

五分利券九九四枚ノ額面日貨

一九六、六二七、二六〇

ハ如クも此の如き話と云ふべし、他は事件の善悪に感し
以て自らの早稲田を大子と認め可く受くまの
き文部省の并に郵政省の親定に送ひ若干の賦
金も供托する事あり日本政府は行佛貸回庫債券
五分利附五分を以つて若干と認む事あり金供托し
あり然らん四分利附の一回債券を發行せんが如く
を償還期限五十年と云ふ故を以つて五分利付に比
べば便甚に低く、おる債券の間に若干と若干あり
乃ち別紙計り算書の如くして、此の五分利債券を以て
十の八の百歩目の額に合して平味四十分山平味半額を
以てするは是の計り算と云ふを以つて、之を以て彼
に換ふ心しとの感起りたり、えん又此の換に取らる

三ののり仕合と謂ふべき也

○此の如く後大隈及び學修久米博士編纂の御時
史の條を讀む中、久米史の如く、字を以て
久米史と云ふを載す、教書と聞史の間柄、孰れを
當るに久米史の誤を前記せしむ、此の如く
先生漢皇好、至今志氣烈、堂々八尺身、心膽如金
鐵、高名在海外、凡來人所仰、笑談經濟策、能滿
長短道、余字先生道、實從六歲時、竊慕聖
賢、唯因先生教、得窮風化源、吾輩最練
武、策研夕討論、君恩如海山、先生如海山、何及
先生恩、薪膽十年志、請看樹國策、男兒不

徒死我生豈偶然。湯地多碌々、慷慨獨仰天地靈
先生知書以寄几前

兄と申すは、閑父の教書に推服したることを目知る
也。教書此詩を得る時の日記より、褒揚さす由、
且詞亦双美不他出後」とあり。閑父此詩年未廿
歳と満ちず、而して此の詩あり。教書に「啓次を想
ふへし」

十一月九日記

日本師大書前を教書し二三の書籍をの、

高陽山人待給

三冊合一

中山高陽の著す所ある七年の版也詩を
太比のうらやまの人の集稀觀に属す
高陽の畫を受するもの此集を玩はせる

可くは、書名のなまらざるは價不廉也

既所殘書

一冊

山本素行の此書の名を帝大圖書部に
すより一五二年前不詳な撰本ありし
とあり余の兄も今固を始とす、此種の
書著者の自序に「既一又初めり内容と
味のなる

四言對相

一冊

支那の學識の事のこととてそのまゝ冬三回
あり、稀に複製を有て之れ、複製を
みつゝあり、今得るを常山楊を文二
の覆刻し、そのまゝ巻尾に跋あり

紙の文混の古画類集の用ひたる日記の
表紙の如也

外に西田春耕奉刻の明治古畫款語四冊を購ふ。此
の頃十四年刻する平の清大家の古畫邦人の花
所の辨を撰き約六十家の古畫款と印とを厚寸大に
句奉す。此種のもの他に古と多しと名も多しと
親しきものも、これ較し物也。流石と名前の印を
皆改訂す。是れ一印語と見ゆるも
可也

(十一月九日記)

○友人あか石名刺書之傳名冊子の標を編纂して
廿二公けし。今又西田の本と名つげし二冊を出す
体裁優る名刺と同一く志紙の体裁を採り各書

の一部分と模刻して其者の一冊を知りて使ひ、
くは小解題を附せり。此の西田の本に收めたる
辨種のもの如くして強令に改訂するものも
ことぬりしものも幾多し。紙墨共に物と異なり
めりある所のものも、二冊中一冊の如く
しるるといふに價を二冊十三日也。例に據り字
體をさす。複製を志す大抵悦び御考と
す。余複製の面白き感をも致す。複製を
すといふ所以也。

十一月十日記

西田が古畫傳を著し、お高くと書信ありしこと
ハ初め古畫伝が為りし流しんや、その目録
物と名をいふことありし。此の辨種の如く

らんを聞し不見を陳心、所解する甚るまや中俾後
と腹心と自わらひりなすもの少く、こゝろをとり
えんと一々指搦せり。こゝろ古の心か興味あり
なりして遠来あまう研究を統るる事也

○竹冷舎らる竹冷の香句を解るる一冊解る事
未だ全部と頼るる皇あまが、甚るる余の心を
前の世の歌々枯れんとするを解めつくつと此
集とのよき見えし、世の句五七あり、今念心
一二を解す
十一月十日

枯れきりる芦を雨きく便り
芦枯れ入江洲一や亭しの脚
尾花枯れし世の二節三節分

昔枯れし日のありけり 錫の尻
枯れし火を放るる 守

昔亦あまうる 数讀し、おやうろく是くももの荒
干しを解す

篠いらくく 天下の事をほし、いまし

篠あはれ某の花あはれ 雲あはれ

一二三四五六七八 梅 貝

白魚や憚りるる 江戸の魚

あくくともあつふさきもの清あはれ

あ踏んし石踏んがも踏んが夏あはれ

虫各々人各々 秋の感

ぬくくと若菜山の眺りけしと
 春の空や空をうかして山成る
 はらくくはらくくくく梅炭
 梁の鼠走るよ 餅の音
 石一つ二つ小庭の苔萌ゆる
 蟹ちよろしく波打よきく縁の下
 寝し子の動くや今し春やなほ
 白雪の折衝やあけの夏木立
 山あまふく軒に梧桐の騒ぐ式

同上録

○上月十日西宮蒲生なるお物酒井ぬ古堂寸帖若干
 を持ち来り示すを見れば時を深世傳と堂帖に仕立

此ものうまし 概ち巾式の相傳二帖、女房伝(豊玉の夜歌
 あり)一帖後者傳五六帖忠臣傳一帖おのゝ風里巻傳
 兼に雜傳一二帖あり、何れも相傳の時代あり、名指祖
 名の味傳あり、此の跡に皆々ぬるも小きものうら後
 者のことき、女の名刺うらむ七の多きもき、
 を聊う喜ぶの成をかし、斯る深世傳を帖子冊
 子と伝ふもの架中若干を危さんとも扱ぬ時代
 あり、若く少くも古版を欲しく思ひ長拵柄さんハ
 況りの價うらむとあふ不慮さんとも賄ひ入らん之んを
 寸珍架中寸珍とことハるもの

皆又寸珍折帖を宮祓物圖十二枚を得たり
 畫分傳古に似たり或る同人若い此の他歎

十一月十日

明代の雅政あり其意をたぶらぬの候こ

○又竹冷句ありを讀み二三篇を録す

塔影の敗者何を履きつる日影

笑くや夢納屋の戸日扶きん

まのろく我志の堅きしはくや

はらくと馬を食まらん秋の陸

秋の陸をふすかると吹かぬけり

侍あるる尸中このかた秋の聲

日いらく蜻蛉の飲う壺山式

鐵鉢の錢日音あり玉

霽散

清大和

遠陽と飲

○五山塔の出来其功徳のこととて其の可成り
田舎の製を其の山を城道を行く所とて
まのろく我志の堅きしはくや
五絶と示る

何とけしやわが女奇の戸今
載予一こしてさ久紅摩面
子如わ親楓十二詩
清歌宛持忍歌何月舟に

多子思孝之聲非即老也
飲天以補新亦極

某初子

海外觀先子之神詢日矣
遠新法業卷古口乃里快心
庶不負人
畫筆淋漓兼善藝格隨

少掃馬行也一訪又歸了
飲淋戲亦唱山吟以平
古少人將峻才陳之一極
生西拜 翠中書信與合新院

一、友聲穀沙風才
於四色以平

五峯六前の示さんの久遠美雪を壽するの
壽き こゝろを雄貴を加く世をいはうとと
再しのの吹きありたりし

名園松竹の花の祥の烟の黄の雲の新の子の双の壽の延
廿二元元龍今七十十餘の鳥の法の親のの年
洪の範五福壽長首況の中原夫其而
鼓琴鼓琴和和湛芳枵備宿告且者
朱陳增聖自成村男耕女織桑麻著
我祝君家化更及倡隨長令風俗教
五峯と為此心を得る前左の一心を得る心
名三満の月ととくり今備七とある心

天の少元計の報の五福壽のあり何況琴瑟の諧の如
去の如の下の保のあり何之の言只交の又の天のさの僅
者の之の用の打の林の松の福の切の翁の姫の攻の之の延の尺
是の廿一位の佩の方の七十十年の刻のの



五十年、治次曰くこの尺、河原の後、藤井政重
と今、その政重をその如亭、吉原町の藤井政重
と左、假名、の言ふことありと、幸に君の鑑賞に入
ふは、如亭の子也、請ふ君に、贈らん、以て、實を
彼ん、如亭、信、何、彼、を、保、する、もの、余、の、家、に、用
送、り、し、余、謝、し、七、回、く、易、ん、を、喜、ん、て、賜、を、拜
せ、り、し、を、得、ん、余、を、高、俸、給、人、如、亭、の、同、族、也
る、もの、の、り、し、七、十年、に、彼、ん、を、喜、ん、て、言、ふ、は、出、を、喜、ん
す、而、し、七、十年、の、録、を、所、の、竹、方、原、の、地、を、余、の、つ、あ
壯、業、を、破、け、け、る、實、余、を、困、乏、者、に、深、し、而、し
て、倉、今、老、七、夢、程、の、の、結、来、す、こと、無、し、
解、寢、を、も、置、て、夜、に、哀、し、む、を、得、ん、亦、交、を

其、あ、の、一、助、だ、と、い、ふ、二、如、亭、の、、三、如、亭、の、、四、如、亭、の、、五、如、亭、の、
跡、上、光、を、の、を、親、し、六、如、亭、の、、七、如、亭、の、、八、如、亭、の、、九、如、亭、の、
の、也、一〇、如、亭、の、、一一、如、亭、の、、一二、如、亭、の、、一三、如、亭、の、
庭、り、一四、如、亭、の、、一五、如、亭、の、、一六、如、亭、の、、一七、如、亭、の、
得、ん、一八、如、亭、の、、一九、如、亭、の、、二〇、如、亭、の、、二一、如、亭、の、
十一月十日

○十一月十日、本、の、回、者、を、漁、り、左、の、三、種、を、得

其、蘭、を、送

一冊

文化七年二月、一、如、亭、の、、二、如、亭、の、、三、如、亭、の、、四、如、亭、の、
所、五、如、亭、の、、六、如、亭、の、、七、如、亭、の、、八、如、亭、の、、九、如、亭、の、
亦、一〇、如、亭、の、、一一、如、亭、の、、一二、如、亭、の、、一三、如、亭、の、
別、一四、如、亭、の、、一五、如、亭、の、、一六、如、亭、の、、一七、如、亭、の、
と、一八、如、亭、の、、一九、如、亭、の、、二〇、如、亭、の、、二一、如、亭、の、

多くの著書と載せたり

懐園集詩

六冊

集句の詩六冊に及ぶ規模大なりと云

ふへし南楚車馬音聲不所存

こ欲するも原照自名の人と云こ

とと知る 集社三冊集李三冊也

緑満書牕六種

寸珍本

六冊

嘉慶庚寅年刊す所六種と云

あは

唐六如詩鈔

吳梅村鶴湖珮

尤西野四書詩

孫退谷碑帖考

葉小鷺返生香

東岡言詩卷

此者お物屋定尺と云い約を寸堅に

於て小なるもの寸本相應のものを

その内容とす、各屋中の唐紙を部

類す此の類甚だのし、尤も珍とす

し、此者最近北原と云い文求也、輪

入し来りてもの、支那に於て稀観

のものと云い價十三圓也

○上海、程経史子集四部二千冊著刻の筆あり近日

其の古目希に見本と送り来り、これを強ち未刊の圖

書と上版するものあり、洋本と唐本とを瑤瑤

版して縮刷するものと云い致向する、去んば史類と

廿四史あり、その他者名を云い何人七載也

四部叢刊大提供

- 一 本叢刊は最も重要な經史子集二百數十種を網羅し約三千冊あり古今の名著略備はりこれにより數千年來漢學源流の梗概を知ることを得可し圖書館學校及び讀書家等悉く備へざる可からず
- 一 本館古き書籍を搜羅することより實に數十年の永き月日を費やし又國內外圖書館及び多數藏書家の御贊助の榮を蒙つて最も精良なる原版を選び總計宋版三十餘種元版十餘種明版百四十餘種手寫原本二十餘種あり清版に至るまで尤も善きものを選択し此等の善版は悉く坊間にて購ひ難くのみならず中には一見せんとするも得ざるもの少なからず今や一つの叢刊に集め實に空前の盛舉なり
- 一 本叢刊は悉く寫眞より石印し以て原書の精神を毫も失はざることを期せり
- 一 本叢刊は支那上等連史紙を用ひて印刷致し永き歲月を経るも決して色を變せず
- 一 本叢刊の下の小口に書名及び冊數を印入し検査に當り極く便利なり
- 一 日本の諸君御購求するに便ならしむるが爲め特に定價を日金に換算し每部一時拂日金一千二百八十圓とす(但二十四史除外する時には日金九百八十圓とす)郵便料一切要せず但銀價大なる變動ある時これを改正し得る

若し上海通用銀元にて御購求の希望なれば一般の預約方法を適用し得る
一 一般預約方法とは内國の人士に對する規定なり數種に分つ其の中に二十四史除外の場合もあり毛邊紙を用ふこともあり下の小口に書名及び冊數を記入せざるものもあり詳しくこれを知らんと欲する方には後記の代賣書屋に問合すべし

- 一 代金上海棋盤街商務印書館發行所に到着次第直ちに受取書を代賣所へ寄し同時に既刊の書籍を書留にて郵呈し爾後出版の順に依て早速郵呈す
- 一 本叢刊既に六分の一位出來上り其の殘餘部分は續て出版す西歷千九百二十二年まで全部出版せんとす
- 一 本叢刊預約締切の期限西歷千九百二十一年六月までとす
- 一 但本叢刊部數限有り上記の期限に到らざるも若し預約券賣り盡せば直ちに預約停止す停止後の御送金は之か返戻す
- 一 本叢刊の見本下列の代賣所にあり御請求御一覽あらんを願ふ
文求堂(東京本郷區本郷一丁目六番地)
有斐閣(東京神田一ッ橋通五番地)

上海商務印書館有限公司謹啓

のものや寧ろ廣く流布し居る者を宋元め其他名
 家校訂の正本を編刷復刻するとするに致意し
 るに収むる方法古に徹するに全刻の價を千二百八十
 圓に於て廿四冊を任意除くことを許すを以て
 ろる三ヶ年間に二千冊を刷行する餘定ぬの如く
 此を恐らく不能するに備し其力ある者尙の刊
 行するに早晩成功せん歟本の大ききと並に体裁
 小に収むる見本の如し

要するに此の刊行を揚守敬の刊行の稀觀者を集め
 し復刻し居るに倣ふもの此の計畫より支那政府
 の好者家の振興に於て二十四家の花を列し居る

宋刊本 常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏

甲乙集卷第一

餘 杭 羅 隱 昭 諫

詩

曲江春感

江頭日暖花又開 江東行客心悠哉
 高陽酒徒半彫落 終南山色空崔嵬
 聖代也知無棄物 侯門未必用非才
 滿船明月一竿竹 家住五湖歸去來

皇陂

皇陂瀲灩深復深 陂西下馬聊登臨
垂楊風輕

弄翠帶鯉魚日暖跳黃金三月窮途無勝事十
年流水見歸心輸他谷口鄭夫子偷得閑名直
至今

寄鄭補闕

夫子門前數仞墻每經過處憶遊梁路從青瑣
無因見恩在丹心不可忘未必便為讒口隔只
應貪草諫書忙別來愁悴知多少兩度槐花馬
上黃

牡丹花

似共東風別有因絳羅高卷不勝春若教解語

○字回の條名の假名宛提綱並に附圖を辨の附圖の
文化戊辰二月丑政事の銅鑄に傳つて美に内象銅版圖
の世の失と云ふ事、此等も亦も漸中く云ひ行きの事あり
而して文的東漸の歴史に必要料として此物宜きを貴
重の意義あり、今も、辨の条中にもよく所記あり
此の如く云ふ事

十一月十五日記

○此の高等商業(高利大子)の含名と云ふ條も、文的協
会の公の事海濱をとりあへず、胎部字として先依を重んじ
海濱の如く大隈友の海濱あり、俟て日米問題と
論せしむること能はざりて、廣布さるる為め含象
亦も海に盛況を呈し、見ゆ所、俟て思ひ切り
て、病状に現るる、含終り依を(高利大子之長)の

あまのこ同校内りし事新番も、但本部も此迄
未、物候あり大いふ事勝も、此こ十六番目と
考しと心りやうといふ、結構やういふ、早稲田も
ありき、そのと並次やまめやう、此迄終り但本部
に晩名と興しして、佐伯の古とぬさ、十月十日記
佐り早稲田に合を、佐よ部とぬさと伝とんとま
此の、新築に備へべきことの多し、伊太利式に
うんじ七おち、ちうく大合を、の設計七可也、こ
、うの、校反り、お婿技、お路の言あ七法とせら
と、の、お治七許、まめいしむ、この、設計あ
り、へつ、と七三、さむ、この、折付けあつた
此る、校の、前身とも、ま、さ、さ、さ、商業、海、の、不、この、法

一、軍、創、報、と、あ、め、の、回、り、あ、の、衝、と、あ、の、ま、き、
七、の、養、成、も、ん、と、を、お、し、ら、し、た、こ、校、の、内、的、新、り
る、事、の、あ、り、の、銀、行、海、の、あ、も、新、り、た、こ、後、年
あ、ま、を、合、保、し、た、余、の、早、京、に、海、の、あ、め、の、快、
こ、も、此、の、創、報、の、年、を、し、
在、此、の、校、の、新、り、の、事、を、新、り、の、あ、め、の、新、り、の、事、を、新、り、
あ、ま、を、合、保、し、た、余、の、早、京、に、海、の、あ、め、の、快、
こ、も、此、の、創、報、の、年、を、し、
○滑、達、の、事、件、と、ま、あ、り、し、た、こ、某、方、面、に、喧、嘩、を、許、を、云
へ、滑、河、流、谷、如、う、大、和、を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
滑、河、物、の、回、り、の、事、を、五、十、日、の、買、り、し、之、を、通、家、の
萬、地、博、也、と、六、番、目、の、事、を、又、さ、さ、さ、さ、大、和、を、之

れと云ふきつけ、買賣の始り、及びそのまゝの書、委托物
積領不申利益云々、とまゝの書、及びそのまゝの書、
一、河物を懸き、起し、北多、河入、日、日、日、日、日、
澁、め、を、持、取、する、こと、と、う、う、う、う、う、
と、姻、戚、関係、あり、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
る、白、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
と、と、絶、文、を、名、す、もの、も、あ、う、と、う、
ら、か、也、此、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
(十月廿五日)

○今日例の如く、圖書を過り、二三種を得

- 一、天禄琳琅書目 正續十冊 大奉 十冊
- 一、古梅園墨譜 合二冊 四冊本 十冊

此二種、也、事、得、んと、起、し、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
り、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
初、稿、本、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ハ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
初、稿、本、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
外、

一、木法字を不破卷一代記 二冊

これ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
扉、佛、若、西、傷、帝、那、波、列、第、一代記
の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
即、王、歌、を、掲、げ、又、佛、句、教、首、を、採
す、印、釋、の、撰、字、の、名、と、七、雅、の、味

あつたるを致をの部類に入

一化考

唐の

二冊

此考禪景昇撰出所の道考也は井白娥の校訂

を任ん二稿刻せしるは尾に王世貞の

叙あり、右の者うんも略る稀れ也

外に釋氏廿四考 聖一圓の海經をあり皆佐

本也

○郷人本間翠峯書するその通し六枚折屏風書

一隻淡澤山水中柳堤柳散の河を屋宇人物を點

綴し背景に山嶽相連るる筆勢は傑心え

筆力賞玩するは是の左隅下部に印二顆あり

出流より、と双中の上一筆あり

遺物たるも頗其意也、糸瓜の一種の長物之れを

卷する而倒るる購ひたるを常とせん此の如き價

の廉らるるも勿体なき感あり、且らく購ひて外游

●二供すと云ふ 十一月十八日録

○余本年還曆に丁る而して此歳漸く去んとする

を以つて同人中一余のありは還曆を祝ふとするの奉

あり早稲田の同人の末林方より同増の如きに紅茶餅

に招待する其一言を採りて江都市に尋の舊の生

こぶ祝賀の念あり、元来余は還曆の如きものを以て

祝せしむるを好むなり、可成り此の如き祝賀の如き

紅茶餅の如きもの如き、其の如き祝賀と云ふは、

招待状を考へし、其の如き祝賀の如きもの如き、

標榜せざるを以ての辞する能はざる也

本年私るに煥の事としてこのころ一月以来
嗣子重忠に難う内子も着落の事見伴成
没款す此頃漸や回復に向ひつゝある事
女を嫁するの事起り嫁衣婦具を心するた
し、而して自身は是磨を殺さるゝの事あり、
自身を感ぜざるも身磨のみ知て時
の如きつゝく夫を感ぜざるを得ざるし、
二女を遣はさんとすゝ久吹家、東隣の招え
二女三女を伴ふも同行き、この頃結婚前交
を締りせんことを先かすゝ五人の幼の事
の子せあり、皆先家の也、家世に先ち此等

の子を感ふ、見等と二女を母と感ひ余を祖父
と感ふ、高丸の古事、海から先を感す、こ
とを感ふし得ず、撫然と久之、十一月十八
日記

○加州京港は我邦人の末への家、偏りん四洗ひ都屋
掃除、硝子拭き、厠掃除の如き職業に従ふもの
を若人、此等の職業を未だにたすら男子の為す
ことを肯んせざるものあり、而も邦人をして敢て
而して往く者貴族の子弟の類に云々形して、幼く教
服するものあり、と云ふ、幼くして此等の徒ら追
を為すものあり、而して日本四人の事ある事あり、米人
を招ひ折、以て彼等あつと他人の家、職業に服し

はもの今と盛衰しと居り列する米人母之とて笑て
曰く染宗と前年余の家に在りて血を洗ひたるもの
と染宗等兄の輕侮の心を生し共ニ遠きを厭ふこ
ん加州民が日本人を排斥する動機の一端なり勿論
米よりと腐敗政治家のいふが染宗の煽動真
つて力あるもの論するんども我邦人の陰謀の人格
高きものなるに依ること否否可なりありき米
の如き自由國に於て私を治政の腐敗するもの大後飲
こよるものありて何人も之を怪しむものなり何んぞ
り我邦人を煽動せんや全体加州を陰謀の人の禁欲
也今も十年前米人と事を構ひ兵力を以つてメキ
シエより加州を奪掠したるものなり純潔のアンブロ
ソ

ソレと此世にあらず、伊方如や福しるものなればあ
多しこい集まりつるもの加州をうせり、蓋しんを
我邦の陰謀の心を容れん、果加州人を令する
五十年前支那の労働者を獲り賞賜し甘果を支
那人を忍びて勤勉するものなり、而して其
漸やく福位の高きと見えや、前日の公言に及ん
る方疑念をも東し、日本に於て其の日の如くも初
め福位を獎勵し今も其の目的強力の悔りなき
と見えんを疑念する、彼等の陰謀に氣を取らる
る美しき語と堪えず、染宗を親書と階級なきこと
強するものなり我邦人の今、斯く主張するは彼等の
の教に得たるもの也、而して彼等を其の劣るを賤し

き業を従ひてを以つて之れを撰作するとい抑々何ぞ
言ふを
十二月十日録

○田之邊を先以阿賀津と雖も彼は：遊ぶ五峯
報して之を撰ぶ十二絶を絶し傳ふる阿賀の風
景を字すと乃ち其帖を巻りし詩書とを今
朝小包の封書に包み投ぎて又人御揮灑院と成
の神速御すゝと傳くも、其首、錦浦裏溪山
の大字絶句あり、画二枚阿賀の風景を写し頗
の風致あり、絶句十二絶現色珠の如し、其尾
題の：傳る御書一の爲二行に遊ぶの詩一首を
録す、皆心に潤すもの、以てその物に寸の珠と
可なりし
十一月十九日録

阿賀津歎趁曉龍舟
黃林木媚人
舟扁舟柳波
千巖影石里
清川錦浪生
雲垂重疊空
水秀環身入
丹楓黃柳乃
奇
詭如青女
手繞山錦浦
裏溪山
百里雲林半
是楓
夕陽蘆花一
川紅
巨壺
不絕清山
美相波
為人驚
彩虹
清波白石
花仙心
行舟輕
篙如
白雲
飛
飛
雲
石
遍
蒼
蘆
山
中
冬
樹
而
丹
黃
酒
心
人
家
倚
西
岸
秋
深
霜
樹
燦
成
園
清
河
曲
夕
陽
裏
舟
錦
雲
水
遊
飛
沙
灘
高
下
水
流
文
波
上
夕
陽
如
女
雲
如
雙
載
人
如
有
青
山
如
樹
而
家

小華洞接傳山巖西遠也紙亦眼近迷想の
 宜冷灘夕夕白雪ふりし聴猿啼
 天好雪錦曝秋晴筆有倪黃宜不成
 向津川投一宿千巖系齋中法智
 不自曉水自出探奇人在夕陽舟風
 送罷古楓出関東楊川深淡秋
 下筆常希道化工丹青不難其人曰偶乘
 秋霽浮舟去是山紅潤裝中

花十二絶の印十

○昨。散策本郷に利り珠臨客に一書と購ふ即ちた
 の如し

遊盃古博存

八冊二帙

遊盃 西冷印社々長より山陰吳隱石潜其人に現代
 支那金匱の大家に、此方其の鑑花の古博を収め、
 皆其実物と撫し、そのついで各個々考證あり、毎
 紙遊盃花の印を捺す其印皆真に、
 六遊盃私印漢と云ふを得べし、卷首揚守翁
 の題字あり、卷尾遊盃の跋あり、輯尾の
 法華と叙し、宋の刻まると言、現代古博に高
 おもむを千巖齋亭と云ふ、此者原物大の捺本と
 収め、その故に形甚だ大なる、當の寺館の書と
 出せることあり、其時ハ價ハ十圓とありしと、以
 つて踏ふことを為さしりし、今も價半減して
 珠臨客の印あり、其書を収めて終に余の手を帰す

竹架中一北者より大なるものあり (十一月念日記)

口又坊間二三山を獲て之の (十一月念日記)

名山勝景園 三冊 七四

北者支那の名山を因するもの享和年方の政一
して木芙蓉の草子言するもの因も刻七物細
を極む、今北を古と稱也 卷首皆山瀆園の序あり

汲古山房 二冊 六四五五

明治廿三年大改に刊行する所、田能村直入
倣古五十幅の圖を縮刷し以てもの、各圖に
古人の侍を録す、北は南畫の面目を知らん便
あるもの、而して坊間獲ること亦難し

唐百家詩選 三冊 九四

12 徳田製

平山堂園志 二冊 八四五五

北二部共に官版を富田山岡等が之を官版
或十種を刷行し當時北二種を特に薄葉に
摺らざることあり、之れ其内より或ハ云く其
薄葉を必りせしと僅々二部也と、印刷紙
共に精良、平山堂園志殊に鮮明也、今北等
の板、京都書局に保管せしむ、其後、刷行
恐らく今後企て得可し

名山勝景園の記に近記する芙蓉の自序を
あるもの、北園の人劉振卿輯載する所の
唐宋花名家評成、名づけし遊名山記と
云、木世南花を記し、芙蓉すすと云ふ

汲古山房の初て又識す、此原圖直入大改となる
の日、芝川百々の為め、作す不、五十幅を畫す
に十五年を費すと云ふ直入成す生心血
を瀧く不也、各圖に點綴を施し、必らず整
くす一詩を以てす

○南藝文庫に附屬し、大典記念に徳川頼倫侯のま
くした音楽本を世子頼久より音楽院味のある
不々起り比とあるか、今が大方琴の装束
後工の皮履、此の朝堂の装束を振替り、し
この獨奏を如く、後々の演奏にあらう、自合
ち音楽院味をあらうの振替を要す、此の
寸のどいれ、何れをいふか、ラレカン、ハイ、フ
と云ふ音楽を海に、大規模のものもあること
か、この興味を失した、世界のりも、この
ん、式の楽具、如何にも必要あり、大有力
家が、無けん、此装束の出来ぬもの、日本、
於て此のち、琴をとり、此侯のふら

大風琴ニ就イテ

大風琴ハ紀元四世紀頃ニ創造セラレタル管樂器ニシテ當初ニ在リテハ其規模構造等頗ル幼稚ナルモノナリシガ近世科學ノ進歩即チ蒸汽瓦斯電氣等ノ諸機關ノ發明ト技術ノ發達ト相俟ツテ漸次粗ヨリ密ニ細ヨリ微ニ小ヨリ大ニ進ミ製作方法ノ如キモ巧妙精緻ノ度ヲ加エ今ヤ樂器中最モ複雑微妙ナルモノトナルニ至レリ。例ヘバ送風動力ノ如キモ最初ハ人ノ腕力ニ依リタルモノナルガ蒸汽機關ノ發明ト共ニ蒸汽力ヲ用フルニ至リ次デ瓦斯動力トナリ更ニ進ンデ電力ヲ使用スルニ至リテ殆ド完全ノ域ニ達シタリ。而シテ大風琴ノ製造ハ英國ニ於テ最モ盛ニ行ハレ從ツテ製作術ノ如キモ優秀ニシテ世界ニ冠タリト稱セラル。

今般本文庫大禮紀念館ニ備付ノ大風琴ハ英國リーズ市アボット・エンド・スミス會社ノ製造ニカ、リ最新式ノ構造ニナレルモノニシテ此種風琴ハ本邦ニテハ最初ノモノナリト云フ、本風琴ノ注文ニ就テハ本文庫々主世子賴貞氏ノ師事セシ英國劍橋大學音樂教授ネイラー博士ガ専ラ斡旋ノ衝ニ當リ懇篤ナル注意ト監督トノ下ニ完成ヲ見タルモノニシテ就中一特色トスル所ハ同博士ガ賴貞氏ヨリ本邦尺八ノ説明ヲ聞キテ大ニ興味ヲ感ジ遂ニ考案ノ結果バイブ中ニ特ニ尺八ナル邦字ヲ附シタルバイブ六十一本(木製ニシテ長サ八尺アリ)ヲ使用セル事即チ是レナリ。

本風琴ハ高サ約四間幅約三間奥行約二間ニシテバイブ總數一千四百本、鍵盤三段(Manuals)音調栓三十六(Stops)ヲ有シ送風動力ハ七馬力半ノ電力ヲ用ヒ之ガ爲メ別ニ動力室トシテ地下室ニ一室ヲ設ケタリ。

バイブ總數一千四百本中木管二百五十本金屬管(鉛、錫合金)七百二十本、亞鉛管一百十二本、錫管一百九十六本外ニ特殊金屬管一百二十二本ニシテ是等諸管及鍵盤臺ニ通ズル送風管トシテ使用セル金屬管ハ其總延長約二十哩ニ達ス、以上諸バイブ中最モ長キハ十六呎最モ短キモノハ四分ノ三吋ニシテ今假リニ全管數ノ長サヲ一直線ニ延長スレバ其距離實ニ一萬百餘呎(二千六百八十三間、即二十八町餘)ニ達シ之ヲ山嶽ノ高サニ比スレバ殆ド日本アルプス連峰中ノ槍ヶ嶽(一〇、二〇四尺)御嶽(一〇、一二八)ノ高サニ匹敵ス。

大正九年十一月二十二日

○此歌と早稲田の同人に招え高田村のたし紅毛餅
に臨み、漢紙なるお赤肉の改書とまゝの書とを
三人の選書と祝する事、南無阿彌陀佛
の同人お屋をすく損いし事、
ハ早稲田の美事校反る事、
お約束の事、
唐生お中央に此を染まるといふの大客を
お外のたえ日原に一鶴を興し、三人一々
て漢紙と祝する事、同人等のこと、
けり漢紙の事、
以て余の漢紙ハ、
皆く杯を捧げ自を、
12 國田 堅

の出籍日漢紙よりし大要左の如し

○團よりき後修る、
お祝いの事、
答らぬ、
と毒物、
順着、
おつ、
あ、

と道見こきりて四人ら久し振り款合せの機合
を作の比校もそのとある。敢て遠慮するも及
ばぬとお振きも度比御ひある。先刻申す
多摩藩の徳久を見渡すも若んくして
年の多い方ういへども見えて、若んくして
若い方もある。款比がいくらも目遣つてそ
やうな意趣もさうさういへども、多敷ひ
して見ると若んくう若し死ぬと、徳久も
近火の感うあるおあまのいへんくも祝を
くくして徳久みか、いへんく祝をくく振るも
のがある。實ち若んくうの前の今も、毎
いの七回し款振る。二十年も前の今も

毎に執事の款が現る。最早六十前後の
地平線を畫する今日と名曰振ひある。神
同前々何とさう。壽令中の競争もさう。若
の振る感もさう。競馬もさう。壁もさう。こ
れらもが競争の感も、法も、所習の感
後の五分官とむも見えて、時もある。お祝
と受け比らる。か、いへんく。さうして長壽を保
ち競争もさう。先とさう。さうして、高の保
内ある。改もさう。の祝うある。あ、大に
り、備の。の。を。昇。さ。ん。比。が。全。体。エ。ラ。イ
たのが。備の。さう。と。お。か。い。へん。く。さ。う。こ。え。ち。さ。う。さ。う。
エ。ラ。ウ。さ。う。の。の。が。備の。さう。と。お。か。い。へん。く。さ。う。こ。え。ち。さ。う。さ。う。

しる味が無い、自分を自家の経歴を収めたの
抱負をいとお話しよう、柄、有、ことと全死板
目する、唯、自分と酒と此年と伴つて来たの
である、自分のモットーを酒する、死びある、
還暦を子供と返つたの、女と駄目なり酒文
と不相容な飲み比べの、い、い、酒師高
と此意味を、松平も有り難く感ずる、
お禮を申し上る

此へある、松平京四郎と自著自置術一冊
を、お礼を申し上る、三人の、壽延の始り、
と、松平と此二百年、自置術修養の、
致しつゝある、

(十一月廿三日の録)

此、酒次友人の自家の経歴を、
り酒と嗜み、その、
心、
才、
化、
して、
忘、
ち、
死、
二十、
境界、

きつうとせきあひて何をも得る事こそし
ことあり病後二十年とて格別の多うけんと
較る何もうあらずと云ふを得ば此病後一人百
一生の由二十年と云ふを始り去日月こそあらず
んか何もうあらずと云ふを二十年強う短う
と云ふ可く余初病後の今日も此に比ぶれば
日遠過ぎ可くさるを感ず若し去年の時早
く此の覚悟あはば六十年間をおあゆのことと
あり得るうしるらんこそ、えん自にうらまひ

家園 懺悔也

○余初夏時新緑秋季紅葉尤も賞まじし、今も
楓林錦も織り満庭紅葉、殊に大机と面す

池畔の楓樹紅葉んとす、雨後殊に佳也。茶室の壁
に葛あひともこんと多く紅を漸せり早く凋落す、
荒し此の葛楓葉と同時紅を置せば満庭紅と
云ふべきに、此の葉は 草の葉も紅葉す、此の葉は 多分の手
入と愛するも、似たり、頃日 秋の各庭園と一
瞥して、驚き 賞まじしものあり、而も 若し、思へば、楓紅
と凋落の前、無常の感 無きを得ん
か、心ハ 懺悔也

○余壮年とて園者を蒐集すること十年を以積み漸く
く得んハ敷い、三四年前一書を留め、近年又日々
園者を購ふを以つて消遣の業とあり、敢て珍本を
得るを主とす、あらず、唯 唯れ已らぬ味と云ふ者

を購ふのみ、此等の圖書を得るに目録を載せ、名の
けし数餘者同と云ひ、寸珍本日録共併せ五冊あり、
此の五冊に収めしもの約二千六七部、寸珍本
千種を控除し七七千六百七部あり、次若岡に
来し、此一千六百七部中より較々在るものを選
ひ、一本目録を製し、約一千七百部あり、成るの後に之
を點檢せん、約五百部に滿つと云ふも、真の珍籍
と云ひ得るもの極め少あり、印書に較々稀觀の
ものあり、他の部門に於てハ概有編ん、そのもの
ハ、看來り一類を考へざる能はず、今ハ宋本元本ハ一
籍比ちあるなり、玉書即類々名家の肉筆ハ若干
あり、是れ富子圖書外と云ふべきもの歟、宋本

の如き珍籍と云ふものも列し、莫々書籍の
重なるものを網羅せんと志したる、彼果にぞと取
捨せざる也、和刻墨本の如き價値を棄るものも
多し、又多かり、感する所あり、萬葉集較々多き、故に
巻々と全部を収め、寸珍圖書の内三四取り、余は
そのものあり、之れを富子別種と云ふ可し、家出
ハ一切別種とし、一七二反に収め、寸珍の目録に
本日録と名を余し、その書目選擇目録と云ふ方
妥當なるに似たり、
大正九年十月廿四日記
尚記す、此目録ハ若干の複製本を収め、其の
とも稀に複製する、今本一切を控除する、中を収め、
可するものあり、此部類に對して今も出版

七言一部解説目附の目録あるなり也

○古池二三の古画を高くし未だ中々著る者の詩を
録し等小幅二あり一ハ七律二首他ハ七律一首を録す
共ニ幅五寸望尺五寸白乃五二尺の力の柳外自覺の
表装あり冬々支那風の形ありん又柳外自覺の
考考の書と黄任、黄任の書と云ふ、清和代詩壇の大
家の、録する所の三律皆集に收めありと云ふ、其
雍正元年の款あり、香雪の書の者多し、小四也
此二幅羅振玉舊蔵と云ふ

柳外環書の友人に余未だお説くを、張君常より共
ニ詩畫を看るに送るもの君と柳外ありと云ふ、余古
池を以一寸幅に詩畫を以て、張君の錦緞一匹の

○此は姉妹帖とあり、一ハ粉筆あり、二墨えんとあり
黄任三律の由一を録す

南来日、趁輪蹄征驛迤、日又西客客何妨
屋敞迥禦寒、齋間酒高低、乍闲翻觸胸
中事已睡仍浮、面上泥、最是五更菊
月拍沙海上、一少年稿

録公出過舊好驛和屋詞韻之作
雍正元年五月十八日、萃田任書

此二幅終に贈入る、小物屋の物、形状適すと云ふ、
○坊間之書、其甚好、得度時出版の流
字を以て、頼山陽贈位の節、祭典を奉りけり、
若かりし詩文、初紙、紙向、字を載り、二友、山田一らの

古くは七載にありて巻尾にあり山陽の事とを論じて
てゐる。其の河内や石の諸漢書に記す。精阿部不
と南北朝の正朔を論じてその日をもその史の体制に
欠點等を論ず。一二巻尾とあるべきものあり
は且初めに記す。その他北本末松論漢書と云ふ。左
の印記あり。此者蓋却又ハ漢文セントスル者ア。ハ早連
知報紙を論ず。末松論漢書。氣板を印記する。一矣
山陽と江戸細秀の河内肉筋論交あり。や否やと
帝は福柄となり。其の山陽の事。北山陽論に
を私生児とあり。其の山陽の事。北山陽論に
ことあり。其の山陽の事。北山陽論に
此の事早く死し。其の山陽の事。北山陽論に

の著を元す

○此の事性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論
す。其の性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論
の性態に接する。其の性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論
す。其の性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論
御きつ。其の性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論
す。其の性態を基礎として西洋の事の間を行は。心理を論

道は米國の少年の心。此は其の脚をのりて
其の心。或るもの事を家。此は其の脚をのりて
其の心。或るもの事を家。此は其の脚をのりて

を祝し且つ其の勲いばりを多し出さし
こゝ東洋十年の汗あせを流し其結果とて其
を勉む事あるを喜ぶ且つ曰くあるに計り不豫に
て居るべき満ちぬる、自分うるまひの務さ
に於てこれにありと戸を開き良人を引入ん
一説中一ちんか三四の少児物を養へて寢て就
き居らうと好笑 皆一人の如きもの
○是の由あり節五峯を視其の刻を待て
る物あり其の福を乞ふと五峯より其の
職の道ありと到る、煤者の意地ありしよ
ふ着を俟つて修理せんと呼し居りしに、改て五峯
の手を以て修繕せり、東洋に法換あり

○時常望左酒海肴山于山里之中 作友原詞
數十卷 亦其類之四方物 某某某 今為快
亭 不記者二十首 句 追憶 修 亦 追 原
枕上一夢也

丁酉丑菊月 山亭 久松 紙 其 其 校
其後、其し其復修之在の也 (十一月廿六日録)
○一以秋動政の高の邸に 坪内早蓮 其の増田治
也 亭と合して其校の件、其章大の海嶽を教ふる
乃ち次の其古詞也 現る其の復修を 其十年十月
其其を以て其其の復修に 何人を推すへきや 其
倒の詞等あり、其序と以て論するは 其 (男)
と推すも其其其 此人 其各の 其 田中 其

ハ後定の後進も今現に任名の漸くあり現る也
と彼の任名をさしあう。北人の名をさしあう。業の完
成ハ北人を俟たざる可し。多分の名をさしあう。去年田中
の不平のゆゑに現るを罷めんとし。當時次期の名を
と内約して責任せしめたることもあり。と方北人を推すの
外あり。然るに交する校漸やくさる。公選の風潮を揚
げんとする。幾分あり。田中ハ猶及の性質あるもの。故に校
内快く思ふあり。と方、横濱を揚し之れを
くることある。而倒也。ありとを田中を次きの名を推
すのめ無けん。と。横濱を揚し。同意せしむること亦
容易なるなり。横濱を揚し。天竺の任名擬さ
れたることあり。例の騒動もさる。やみん。

横濱に此次の動向ありと略々推す。し。定名人
忍びたるあり。と。横濱に断念せしむること共
進ん。田中を推すこと。運ばん。或は大段
信考あり。めき。その他田中ハ快くさる。或は
赤平派の責任をさしあう。との相提推し。と
田中ハ反抗せん。と。右提し。次期
の次期も。責任の難関あり。後向凝滞の未
年のゆゑ。ある。田中の名を横濱に。急法
を遂げ。決定的な。解を早く得置かへし。と
さる。考あり。勿論横濱に。名を洋行
を以て。横濱す。

○河合仙舟の山内家高らと云々印は此に
 収め、二刻共之に満す
 十一月廿五日



○此紙紙作の書生もお手紙新撰文の一場の漢文
 を試み、同じ紙紙作と論じても、此の西海は、此
 二つと云々小世變のことと云々、田舎の言はんことを去
 の意味は、此の書生のことと云々、此米人を白を貴むん
 貴を賤し、此の白米人種を貴むん故に、貴を賤し
 るるる貴人の勢力を此の、獨り此の貴種と云々、
 貴貴人種の勢力を此の也、米の加州、此の
 日本人を排斥するも、又曰く、然るも日本種族の
 為め、加州の白人化し、此の也、此の也、野菜の
 あり、日本人の、日本人退去しては、此の也、
 菜を心する、此の也、米人の我輩と云々の腰を、
 力心すること、此の也、此の加州の彼等と云々の

あり、箱入り加州の土地の白の妻とせんことを云ん、直
向の赤れを随変に樹る回く、吾んを老土の赤化を
視す白化を即ちの赤とせん元りも其元日本入排斥
を非とする也、赤化と云ふも赤化に反するの語なり、其
處を以て此の如く赤化を因のあり、排斥せんとも、赤
化と排斥のもさう、京師の赤も夥なり、朝鮮の山
々谷前、皆山嶺を露らし土りく其のま
けり、其結、然地物なりし、其まに、露の今も
山なりし、京師の代の山なりし、我まに、露の今も
別るまの山の赤く、其まに、其赤もを其も
り其まの也、其まの文の赤と謂ふ、其まに、其赤もを其も
の、其の上下を其まの白化を其ま、其まの其の

如く、冬時、麻を用ひ、波等々の之を汚すを、其まの
板彼等々の、其働を其ま、其まに、其赤もを其も
の、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
の洗濯也、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
の、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
一因に、其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
の、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
川と、其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
の、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
の、其まの其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も
七白一板に、其まの働を其ま、其まに、其赤もを其も

白人今も其赤化

を恐るつゝあり、又六六を恐る、吾ら帝國の世界に誇る
 と全島蓬萊菜の心算、樺村然共六六なる山五圓と云ふ
 故に、嗚呼、何んぞ毒化し去るる忍びんや、先以油膏
 の節汽車の車窓より、而依の家山を望み、雪網
 一抹の河の翠、清らんと、其美を、北流の
 野由と端の、一碧快利あり、此れと傳ふ、日車中、毒化
 と宣傳する某あり、余ら向つて、此の権利を云々
 赤川村茂の、此の赤川村の、余ら、幼時
 寄席なる母家の村の、此の赤川村の、余ら、幼時
 幼時寺子屋、此の赤川村の、余ら、幼時
 此村の、此の赤川村の、余ら、幼時
 其味、此の赤川村の、余ら、幼時、嗚呼、村を

毒ら毒化の意を、此の赤川村の、余ら、幼時
 唱して、此の赤川村の、余ら、幼時
 と毒化せしあるを、此の赤川村の、余ら、幼時
 自家山と沃土あり、此の赤川村の、余ら、幼時
 嗚呼、此の赤川村の、余ら、幼時
 昔、此の赤川村の、余ら、幼時
 白赤黄青の、此の赤川村の、余ら、幼時
 所す可なる、此の赤川村の、余ら、幼時
 ○昨りの日、此の赤川村の、余ら、幼時
 久須美雪舟の、此の赤川村の、余ら、幼時
 先代、此の赤川村の、余ら、幼時

跡の急なるハ庭あたるし、その交り今もあつて
与士曰、此文亦、江部流る也、北別、在前と別、其
ある者、唯北、北月、後、後、地、ま、と、先、代、古、と、之、を、其
以、満、地、を、辨、ん、と、せ、し、也、於、ま、と、交、指、し、み、生、因、前、終
と、買、入、と、果、さ、し、し、か、今、を、漸、く、併、す、こ、と、を、得、て
背面、大、い、ま、の、地、あり、所、應、の、地、味、を、辨、り、亦、書、す
九、七、千、坪、と、積、る、先、代、の、意、は、百、坪、に、九、十、坪、と、以
つ、二、積、積、を、一、や、字、未、だ、名、あり、今、も、字、を、辨、
べ、よ、との、伝、説、あり、即、座、未、だ、を、得、な、ら、む、の、地、を
約、す、千、坪、の、地、を、多、い、な、ら、む、也、因、此、を、以、て、因、此
而、柳、の、庭、画、あり、北、画、家、多、か、を、促、し、て、何、
れ、を、紙、上、に、任、去、の、物、を、畫、け、何、り、ま、難、物、と

最も画や、之、を、も、た、混、融、一、と、言、ふ、ん、と、一、層、交、に
種、々、の、形、を、画、く、皆、ま、甚、き、ま、ま、と、ま、ん、と、画、中、に
元、込、み、高、長、即、如、の、能、あり、初、め、入、洋、字、の
子、を、横、に、書、す、ま、ま、し、無、窮、の、符、號、ま、ま、画、の
之、ん、を、眼、鏡、に、擬、し、法、第、一、人、物、を、畫、く、紙、大、也、
今、を、次、び、又、の、一、字、を、画、く、画、の、如、く、流、思
之、ん、を、ま、ま、り、く、難、能、也、と、漸、く、一、層、を、
を、画、き、又、字、を、腹、を、の、中央、に、任、地、を、元、り、
の、左、右、に、氣、を、画、き、僅、う、れ、其、を、書、き、ま、ま、昆、命、と
能、を、出、す、ま、断、つ、繪、海、り、ま、ま、の、今、を、左、河、の、右、に
の、高、標、を、画、く、へ、し、と、注、意、し、日、以、初、め、と、其、を、
取、り、人、を、画、く、こ、ん、女、河、の、高、標、の、画、の、ま、ま、と

ちよるゝとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 神皇のまゝとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 入津の神皇のまゝとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 大方名をえ流衣に鄭重の侍遇をうし、小島名を毛
 の底子の風星をえ擬して一字又ひりあり、此は
 のまは雲國とてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 次傳をえとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 東馬の深院や一曾我十郎の遺子と祖元とを
 のこととてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 りとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 涙流とてと神のまゝとありて一人物を描く非違の
 と同郡の好まゝとてと神のまゝとありて一人物を描く非違の

住雲園記

久須美君雪堂越之氏族也。相傳其先出自曾我祐成。累世家三島郡小島

谷。好賢禮士。儒雅風流。蔚為一鄉聲望。自享保中築其園。至明治擴

而大之。名曰住雲。又標十勝。屬予作記。予近游長岡。將抵小島谷攬

其勝。君時在京寓。令嗣東馬君邀予于新瀧。汽車駕越後鐵道。先謁彌

彦祠。轉向小島谷。未造園數百步。見喬松偃蹇樓屋參差者。不問而知

其為舊家也。既入園。樸茂蒼秀。岩古而石潤。隨步成趣。松籟謔謔然。

澁音可聽者。曰聽松墩。有詩碑詠其勝者。曰崇詩坡。脩篁環阜。碧玉

相磨者。曰琅玕丘。杜鵑躑躅映山紅掩崖者。曰映紅崖。青山排闥屋額

臨軒者。曰拜山亭。層雲纏脚者。曰升雲徑。憑高眺遠。曠然放懷者。

曰收遠臺。俯乎仙窟若鏘然有韻者。曰玉琴洞。磬流潺湲可以滌塵襟者。

曰暢神泉。楓林飽霜者。曰紅錦坪。凡十勝。仰則彌彦山巖然凌空。依

住雲園記

依送碧園中矣。吾聞久須美氏本支蕃盛。君從祖父逸翁備儻好學。開鳴

谷館以教鄉邑子弟。與龜田鵬齋市河寬齋大窪詩佛等親交。皆寓其家數

旬。若柏如亭淹留寢久云。逸翁中歲慨然有所思。赴京師。筮仕有栖川

親王。弟記內承俊而早世。子教室嗣。又讓家弟震外。震外游江戸。從

學朝川善庵。問詩大規磐後。君即教室長子而承震外後者。戊辰之變。

從北陸鎮撫使致力王事。轉戰有功。賊掠小島谷。據君家為牙營。與

板出雲埼官軍對戰七十餘日。遂放火去。園中老松斷然剝蝕者。罹其災

也。東馬君指示曰。當時第宅悉燬。所剩者纔有此園耳。夫自享保迄今

歷世且二百年。時運轉遷。而林壑依然。福澤尚存。殆似有神護焉。住

雲者蓋住雲中之意也歟。

大正九年歲在庚申春二月上澣

勻水 日下 寬撰

須美家より作酒守に任じし五石を物うりてと奉
冊末異教のさうと説ゆす。

曾我祐成の弟所謂四上養次坊と云ふの四上村
異陀羅寺の僧なり。曾我兄弟復讐に世して其
以刑せらる。祐成の妻一子を孕んじ遠く海を
より此の僧に頼んじ遠く彼海を来んとし余
中上州に控むと悦し。後世を長く曾我氏
寺に葬好ありてんん早や其人亡らうしと
え東馬に或坊に謂ふも也。前に掲げたる
文同也といふは、又追記す。

常山の春景山の一橋河の古池齋くし来りて此の人
常山何僧といふ八十餘の高齡日打賢一と云ふ、的也書
宗隆森の根本寺

（歌若水に和歌すところ）

其よりくく風歌あり常世の南画家也人ありと説と
まじし癖あり酒に掲げし歌一も備へ玉峯寺あり同
貴す。後次余の心持の難と酒に應用し、酒物
らうもの小量を貯すと云ふ、玉峯寺の言早や小聖とす
べしと、酒の醇厚聖に比す、支那の御あり、玉峯寺の説
こ程に印をとりや聖と刻するも一具あり、余
前の山家家の別邸を治ひ丸太心りの茶室の事
を後り、室名を酒のんじんと自持す。玉峯寺の
く如月庵ありし、余も一のるん月令の如月と
さつと云ふ、一の成月日家を散れ方、而も味あり
杯もも常山、同室も一のるん月令の如月と
り、聖子半月形をありし、四角に花を花生を

うくる不あり、月を以て余より取て不可有しるは
一考を要す (十一月三十日)

○此頃酒席に校書其他の藝人と召し酒を備けしは、
時にお眞税を徴せしむ。昨日偶に晦日に合し、一酒樓
より助金をせしむ。之を點検せしむるに、此頃の仕掛
の尾に全四回御税とあり、これより先と初はお眞
税を拂ふ、すべし此税を定めて全額に課すは、
るに七千圓の勘定に、四十圓を課せしむ。刻念
こ象興漢より國金七難し、税額亦たよんが、
の纏銀より七多額に上る。課税の杓子定規より、
婚禮の式に親戚のみを合し、お眞税とて、
を扱けば、お眞と目され課税を免れんと、余

一家のこゝ夫明家と婚禮を奉るべし、
親族を合する際、お眞税を注ぎ、
士見物も此の注ぎあり、
お眞税と扱くり、
見做せしむ、

十一月一日記

○稀方後、お眞税を注ぎ、
山年山白、
海新志出来、
今年七等山の遊相日記を
此の年、
お眞税を注ぎ、
先の下に、
天保の年より、

意味あることを記し、圓くを縫つた後、淡彩施しあるをば
 ぶらぶらと模して彩を施せり。海老の記に比し
 ハ上出来るものなり。ゴロタイ。フ散り欠いたる地紙を
 早くするものなり。此り又菰云々死者の記をあり、
 中々、華山の刀字お記。一帳あり、これと書
 尾の文政乙酉云々の巻あり、華山が鉦子
 二海氏なる時の心算んすべし和文に志すし之個
 あり、例の函蓋の蓋あり、首飾あり、襦袢如
 するも、海ありし、内兜、絞あり、帯あり、花あり、余
 未に見ず、北帳の印刷、矢張りゴロタイ。フ散り也。巻
 本見地は、行届りたる不あるを、巻成とす
 十二月二日記

第五回配布本解説

參海雜志 一册

(宮本 仲氏藏)

本書は第一期刊行の「游相日記」に後ること二年、
 天保四年四月十五日に華山が三原を出發し、三河沿
 岸の漁村を巡遊して、堀切村より西南伊良虞、日出
 に接する縦横一里の大沙漠を踏査しつゝ、周回纒に
 里餘なる一孤島、伊勢の神島に渡りし時の自筆繪入
 日記なり。

此行は三原藩の系譜及び三河誌取調の公用を兼ねた
 る旅行なりとあれども、邊海の防備に専ら留意せし
 當時なれば、特に沿岸を踏査しつゝ、危険を冒して大
 海の孤島に渡りしには、何等かの別目的のありしな
 らんと想はしむ。然れども行文は流暢なる紀行文に

過ぎずして、黒船の來去を尋ぬる外には、毫も時事
 に及べる跡なし。而も圓轉滑脱にして叙景に自在な
 る事は能く寫生圖の不足を補ひてぶつ附けに書き流
 したる手控にして猶斯くの如きかと、巨匠の力量に
 推服せしむるに足るものあり。殊に和地村の醫福寺
 に藏すといふ木曾義仲の祐筆たりし僧覺明の手跡と
 稱し來れる六百卷の大般若經に對する考證の如きは
 一の史的考證資料とするを得べし。「桑華蒙求」(本
 願寺記)等に據れば、覺明は元南都興福寺の僧にし
 て、治承年間重仁親王の令旨を奉じて平家追討の
 企に參與し、淨海の怒りに觸れて遁竄し、後、木曾
 義仲に隨身して侍史となり、義仲亡びて浪々所々に
 潜伏中、この大般若經六百卷を筆寫したりと傳へた
 り。伊良虞、神島等の風俗の如きもまた、好古家の

一、研九洲史料なるべし、此の冊子に収める圓五十一帖
 お日記のりるんこ三信り云々

○後、婿或る、ゆくゆく向う家人大勢地の、お物持を、
 の紙を、お物持(圓)をおかすものあり、た中、おま

揚げをえり、氣勢を日下漲るつえ、す快ぶを稱
す、余の言ふ所の情をまろくえり此情のこときとの掃
ぬ也、洗滌を記するものえりとも、因果を拂ちて世
頓念の世中川物外の善悪を存する、上頭文符を
賜しをも又の勢疾疾、言ふ所のこえりあるを轉ん
どうとす、すて海潮樹林、法紅を拵す

改宗山草法匠遠直ま、柴荆薪丈拵

比鄰花洲酒飯身をもり便是極原

祀人

解えり

癸巳七月後百回法子也(於禪原亭)
秋園不減三伏杯、猶舊維飲狂歌

庵上見法画字、秋園同似之人

中宮の改人

○未八日の維持負當に附撥さるる也(昔位親定案
左の収むいん早大の持神、九月廿七日、昔後
の濫授もむも慎まざる可からず、元初を過七、昔
校の権威地に際立つ、規定の可あらざるを、
右の悲しきも、情弊(情弊)も、令改めら
再考三思せんことを要すともふ

十二月四日記

早稻田大學學位規程

第一條

本大學ニ於テ授與スル學位ハ左ノ五種トス

政學博士 法學博士 文學博士 商學博士 工學博士

第二條

學位ハ本大學大學院學生ニシテ貳年以上研究ニ從事シ論文ヲ提出シテ學部教授會、審査ニ合格シタル者又ハ論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ學部教授會ニ於テ之ト同等以上ノ學力アリト認メタル者ニ之ヲ授與ス

第三條

學位ヲ請求スル者ハ論文ニ履歷書及審査手数料金壹百圓ヲ添ヘ其論文ノ審査ヲ受クベキ學部教授會ヲ指定シテ之ヲ學長ニ提出スベシ

第四條

論文ノ受理ハ前條ノ學部教授會ニ於テ之ヲ決定ス

第五條

一旦受理シタル論文及其審査手数料ハ之ヲ返附セズ

1: 宛在臣殿

第六條

學部教授會ハ各學位請求者ノ論文ニ付二名以上ノ主査委員ヲ其學部ノ教員中ヨリ選出ス

但シ必要ニ依リ他ノ學部ノ教員中ヨリ選出スルコトヲ得

第七條

學部教授會ハ主査委員ヲシテ論文提出者ニ對シ試問ヲ行ハシムルコトヲ得

第八條

主査委員ハ論文審査ノ要旨ニ意見ヲ附シ壹箇年以内ニ之ヲ學部教授會ニ報告スベシ

但シ學部教授會、決議ニ依リ其期間ヲ延長スルコトヲ得

第九條

學部教授會ハ主査委員ノ報告ニ付無記名投票ニ依リ論文ノ合格不合格ヲ決定シ合格ノ決定ハ學部教授會ノ參分ノ貳以上ノ得票ヲ要ス

第七條 學位ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スル行為アルトキハ學部教授會
議ヲ經テ其學位ヲ授與ヲ取消スコトアルベシ
前項決議ハ第九條第二項ノ規定ヲ準用ス

○吾ノ午後一時も大隈邸に於て文部協会の各派は
そのもくじの事も有る者九十名松波博士(仁一)今
井時郎(帝大教授)おぢい諸法あり、松波も今月
夏ヒリツピロ大隈の招待して居り彼の地は
き講義をあり、同回を研究しゆりる人をも皆
からヒリツピロの獨立に就て三時有る満る諸
法をあり、ヒリツピロの歴史なりと現在の状況
こ一獨立とともする諸る資格ありや否やに就て詳

細に存る、ヒリツピロのそのもくじを研究しそるさ
る者ガ、取つてそる至大の利益を以て其の言を、言説
法物を測けり流石に志切りそ其の言を所する
くは興味あり一回大隈の満足をあしむる旨あり
聴き入り、オニ家と井時郎との一書も革命の彼
れにありし、引續き本土にありしを去る
三月迄滞在するものも、時々露西亞の出版物
を、唯此時分充分にそるし、以て譯者も満る能
ハせりし、且つ年最き人目の習うるも、現を多
く引用し松波のめく玉巧なる能く、保し此
人の最後と語りたる、首太民族の秘器、此れ此
の民族の富國を中心として、世界に布する陰謀

の大膽を聴きあそびし玩味を感ぜしものなり
○早大の同人余等是唐に下るものなり其家を以て
う瑞備を多し回方設場を多し其の余を以て入る
の門下生格の石塚外野五人の習も前月中各一計書
ありて何れも辨し難く、石塚等が僅しと十九りと定
まりて其の由も正式に受くることありき。此等
の僅しとて教多の人のあまゆせりさんと雖も其の
氏名を辨しし示しざるを見れば、親友の友人を多
く掲げしんば門下生格の習記も今も友人格
の人を撰ぐに不可き。又其の習記も今も友人格
の習記も先年を撰ぐに不可き。先以て改て早大の習記
を撰ぶる人を示すに撰ぐに不可き。是瑞の地にあるもの

此等ゆするものなり、是等を一々捨て抹殺せざる
結果、教を大いに減らしんば、其の習記も一二の人
にあまゆせりし人の中よりある。何れも友人格の
習記も今も友人格の習記も今も友人格の習記も
の習記の別るに接し、一漢字もあつた。其の習記も
更ら習記の字あまゆせりしを悔へんば、其の習記も
其の習記も今も友人格の習記も今も友人格の習記も
も、今も友人格の習記も今も友人格の習記も
せざるを得ず、あるは友人格の習記も今も友人格の
習記も今も友人格の習記も今も友人格の習記も
ら、其の習記も今も友人格の習記も今も友人格の
習記も今も友人格の習記も今も友人格の習記も

拜啓時下益々御清祥奉欣賀候扱而市嶋春城先生には今年愈々還曆に丁らせられ候に就ては兼て先生と御入魂の方々並に曾て御世話に相成候者共一堂に會して先生の御臨席を請ひ共に南山の壽を献じつゝ膝を交へて懷舊談など承り候へばいかばかりか愉快に候はんかと存じ乍潜越下名の者ども相謀り來る十二月十九日午後五時より芝公園紅葉館に於て一會相催度候に就ては何卒御賛同の上萬障御繰合せ御來會被下候様御願致度此段奉得貴意候 敬具

石塚三郎

大江乙亥門

大正九年十二月六日

賀田直治

野口多内

松本弘木

江部淳夫

市嶋先生様

追而此催につきては實は先生と押問答の結果漸く極々私的に隨て小範圍に限る事として御承諾を御願致し乃ち左記の方々に限り御案内致候次第に有之候間御含置被下度候

當日會費金拾圓御持參被下度猶又準備の都合有之候間來る十七日までに何分の御回答願上候

左記

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 奥田 雲藏君 | 小倉鎮之助君 | 竹村 良貞君 |
| 高橋 義彦君 | 種村 宗八君 | 紫安新九郎君 |
| 山田 清作君 | 松井 郡治君 | 小久江成一君 |
| 小林 堅三君 | 會津 八一君 | 阪口仁一郎君 |
| 廣井 一君 | 森脇 美樹君 | 關 太郎君 |

物と名とす所ありしが、たがのりより、松を六中を改
姓の想ひを繕る(一)つゝ、あゝ也。

天中と景表を、杉山松吉を、逐つて終に千名許
の維持をも罷り、たが、其終、あゝ、維持の
補えを、ちり、と、の、を、ち、や、い、ふ、也、
このり、ち、や、い、ふ、に、た、が、の、り、の、
二、目、下、維、持、も、三、名、あり、一、人、た、が、他、の、二、人、も、其
と、ち、や、い、ふ、を、い、ふ、の、あ、り、に、あ、り、が、ま、し、た、也、
法人は維持をも、た、が、の、り、の、り、の、り、の、り、の、
式の名を、具する、と、見え、た、り、ど、こ、も、む、ち、
あ、り、人、あ、り、也、

○十二月九日南の信楽郡に於ける山姥の即ち唐納の
會に利う二的の可動の君軍者を漁り得る不吉の少
あり唯れ念心の玉一を得たり即ち

一 康熙字典

二 康熙本 四十冊

北青山梨福川平津をりて茶器も数冊以者入
り悉く福川自筆の字の大家の字を架中
の論と為する是の惜むるの印記を湖けは福川
の出入るること一目瞭然たり價七十円也一
函と作し之れを珍母蔵と名付す
他と知るるは是をんじ胎部南都の茶器も
り近す坊の稀觀の玉こ一日友堂子玉の照相
詩卷の内 東江明庵白石吟集南海堤巻

但殊南都玉山お山大典と如十二家の詩を
本六冊に字一巻もの詩卷の母一部に過ぎず
ともども 知人川田屋の舊蔵に川田自筆の
や未詳うらうらな名詩卷の標本とて玩弄
是るを多の詩佛の又書の以るを 録體に心
往とありし刻したる碑文の板を六巻の具
味あり 江戸金石の内加へし詩佛の室福田氏也此
碑 篆額巻菱湖

○偶々吉田一皇極の近所偶々并に旋録を讀む
りしに後の代也 煎味ありし 皇極の
考極の地ありしに後の代也 皇極ありし
公儀の 皇極の 皇極の 皇極の 皇極の 皇極の

史考の遺文多き固方の考證に屬す、此の位は從事也
と後述の如き多し、其の七、望嶽の遺文の一斑を
觀んば得べきもの、此の片々たる三冊の遺文を以て
傳へ、望嶽の著述ありしを、其の旨を、聞するもの
あり、其の如く、千の巻ものなり、古文稀貴家と
多く極高を揚ぐと云ふも、望嶽其先妃の遺文を
一書せり

此三冊文政六年八月淺茅子新考所和名を居り
亦、横山所和名を居る所の刊する所、其の如く
の京都に在りし古本也、此の和名を居る先代望
嶽の門下生なり、其を以て河のありし、其古本
公けり、朝川善長居る所、又、此古本、就
し

聊に記す所あり、亦、古史考上の、材料なりと
得、し、依つて、こゝに、お、ま、と、ま

書林充多、父曰、麦、鬼、居士、嘗患喘疾、常食
麦屑飯、而病得全痊、因以其所自試者、精製
麦屑、出以饗之、其意專為養人生、而不必求贏
利、故又攤賣、瘡書于通衢、以列營生、先泉嗣
承家業、當時錢本、纔一貫二百文、生之自力、
家道日隆、遂以鬻書為業、其舖曰、麦屑、没
時自授戒名、曰一貫二麦居士、首丘之義、尤足
嘉尚、先泉奉教於望嶽、深信其學、望嶽没
後、數年、獲盧文弨參校宋本經典釋文及考
證合三十冊、捐貲翻刻、以惠同好、繼其志也

望坡若有近聞寓業若干卷、深藏篋底、未及開
離而望坡即世、其子亦尋亡、先泉恐其久而湮滅
不傳、欲梓行以因不朽、奉其教也、但寓業之刻
時、隨事遷、不果其志、而先泉亦亡、其子慶元主
人、能承先志、以剞劂為任、誅數年而竣、云云
經典釋文三十冊、望坡生前善本、を獲き、を貴
愷とをり、●志泉望坡歿後、宋本を得て之れ
を覆刻す、先師の志を継ぐものとなふべし、一書
肆の事蹟と長し書史に關係ありとも、先
泉の宋本を獲たること、善庵寓業の初善才
十頁、教誨に注せり、善庵の後輩之
時代聊ら異也、併せ志す

見為後、避寇の以え、四原に來り、善庵を
投す、余も同伴、一泊し、法殿の子を携帶
す、偶々、山閑を得、進少、寓業とを復、又終
り、之れを録す、大正九年十二月十日也

○日曜清閑に乗じ、ある奇跡、入ん、康廼字典
を捨す、日此書四十冊、匡版也、篆題四體、を以て
書し、各冊の目錄を標示す、題四者、の字、甚道、健
稲川の奇蹟、深きを見、ふし、各冊教誨、朱
墨を以つて注す、もの、奇、多、く、往々、最、字、を、交、り
又本文の誤謬を正し、ゆゑ、ある、稲川の字、あり、こ
送、訪、見、ふ、へ、し、要、す、ま、此、書、稲川、年、入、本、る、こ、と、を
體、を、見、て、一、目、瞭、然、也、印、記、を、闕、く、を、病

へ来り賜ふ。試みよみつ之れを極く重き者一
斗樽に敵す。余之れを得んと欲する年あり。今此
即ち満すを得ざるを甚くふ。ゆゑに曰く、紙墨を日
出が花をう之れを以つて先生日の遺曆を尋すと
余謝し之れを床上に置りて、善し余會地よ
り贈らん。物を床に飾るを、酒をんかこ
ま此の夏則ちあり。余の甚くこひたる、し、その
前友人とて、酒家の多幸の日にと謂ふべき歎(十二
月十四日記)

○村瀬栲亭の栲亭初稿三冊を購ひ来り、一、
讀す、卷首に江村北海の序あり、北海を製や、

本家、栲亭の先輩也。北海の子栲亭と年
相若く、其の十二三歳の時栲亭と友と善く互
ひて唱和、詩人あり神童と有る、而して北海の子も
矢し栲亭下終に大家と有る。北海の序、之れを言
及悲喜の情、人を動さすものあり、此北序北海
の傳を補ふべく、又栲亭の傳を補ふべし、左の
部分を抄す

人之有感也、有感于喜焉、有感于悲焉、悲喜雖異
乎、所以感之者一矣、但其感之深、有喜而悲焉、悲而
喜焉、古人所謂悲喜交集者、豈其不然乎、今春
某生来、謁余、問其所業、曰、受子栲亭先生門、余
問栲亭先生何人、某生艷然曰、志先生何為無知

栲亭先生、栲亭先生、源姓、村瀬氏、字君績、少時從
趙武梅龍先生、學識淵通、文思精妙、今講子於
永昌坊、生徒雲集、名聲煥炳、于遊、迄矣、先生
何為無知栲亭先生、余曰、然有此言、余胡莫知之
乎、前言聊試汝耳、坐吾膝、汝三十年前之見
秉、年可十二三、人稱其聰慧、群兒稱穎特者、亦選
其頭角、而獨村瀬氏之子、年紀相若、相得友善、
嘗作五言排律三十韻、押以三江、唱和至數四、人以駭
異焉、秉也不幸而殤矣、村瀬氏之子、天錫以遊、年
終能大成矣、汝所稱栲亭先生、即是也、如在三十年
前、余視之、猶之視秉、則余何為不喜其大成乎、既
喜其大成、則悲秉也不幸、不到于此、雖悲秉之不到

于此、幸栲亭子業大成、藉之以釋余悲感、古人所
謂悲喜交集、有如此者也、汝實得良師、能謹
事之、某生唯之而去、下思

漢文家の序文、理多々、形式に流る、内容空虚也、此序文
の如く、意義ありし始りし巻頭、置てへし、人の言行事
蹟、序文に微し得べき者あり、而して人、性、潤却
す、設令事蹟と序文と微すも、原文、固存す、趣
味を失却するもの多し、序文、此序文、ありては、栲亭
と北河の子の關係のこと、世に傳ふる所多し、北河の
序文、その致味、的に傳ふるもの多し、序文、
し、附記、栲亭の文中、酒徳論、一、附記、

十二月十日記

得之餘の麴香録中ニ収めんことと期す
の所歎後後、栲亭初稿と後即中ニ註如言の可
くてもものあり、閑に乘して念心の丑六の言

秋園思

別後数来十指室、每宵清息太朦朧、愁眠以
是多入画夢、中夜毎忘泣如風。

春梅

花柳春芳玉女處、夕陽西下雪臨飛、輕肥
公子無筋力、纖手終牽不得歸。

海梅

此如江南花謝枝、孤雪多冷月来時、香魂似
惜三春出故舞、微風欲下岸。

題画并

明珩鍊玉曰平婆娑、含潤低枝露似垂、乳瓦
一條如指大山度、江外曳相思。

十古句二首 六言絶句

前日乍寒乍暖、連朝细雨斜風、蝶去千絲
為縷、後成嫩綠新紅。

苔色班之上、隔山光面、眠窗、黃鸝似惜
春光、只愛尋楊柳、問花。

喜の郊外

春風江上路、履底草如綿、花畔吹晴雪、柳堤
搖弱烟、衆山窺鏡笑、一路映蒲妍、更欲窮
風景、遙招北渚船。

樵夫詞

去年伐山南，今年伐山北。細木易成功，環木難為力。
為力寧憚難，貪易少所得。生長糜糜間，結茹
危巖側。日暮提斧斤，礪來洞底息。猿狖視人
無，竊糧拊頰食。除非白雲色，世上誰相役。

漁夫詞

平湖千萬頃，供取衣食田。舟楫賦稅輕，豐歉不
擇年。少不誘水性，長結鳧鷖緣。深處釣鄉
鯉，淺處網小鮮。日一隨安眠，一半當酒錢。妻
兒迎浦口，招我薄香烟。富貴胡為者，生涯徇憂
患。

採秧吟

浸種清的水，破塘瀦野水。吉日乃採秧，諸姑率
娣姒。輕抽千鐵線，洗淨就澗沚。每束四五根，整
整一柳比。泥重難移步，低首舒猿臂。弱笠為
葉簇，寒差映水傾。亭午齋野餉，鶴髮買
纒網。素陰燒枯草，汲泉煮茶鑿。輟手
畝中，不復言農務。笑相迎，鄰親互喚呼。上
林枝，雙脚水煙紛如雨。生長畝中，不復言農務。
即見身軒逸，心上何所慕。日入暝，吾廬甘我
藜。芻蕘，唯歛玉燭和。團圓得相聚。

○此二幅二幅之跡一八

林谷山人 大井川圖也

糸車に乗るの一人を挿
こゝろ人也

一詩を題す

五十三号才一難於竹根山

肩輿直列中流家切是乃終版

遠問

詩書共こ其の式し合家花に市嶽登攀
の園と双幅と為すへし

外に田代村小橋の心跡白衣大士の園一幅を
購ふこゝろ日課画の一とせん 輕妙瀟洒の味揚ぎ
し、柳おの花竹をえし柳お自伝の若つぎをえ

北画幅一才七八分堅四寸許 紙本 十席の六印

と接す、表表衣色任也

款云

香雪(松木)瑞遠(福井)成章

(田中)雪村(松田)内洗十一年

六月二日古松出房成

上今字刻



北印出畫と接ひて景物に架す
こゝろ

大正九年十二月十七日

此の又二三の園書を購ふ

王道洋 感齋集 十六冊 四套

自版也唯洲巻先通益全部

謝如補字あり、清初忌むる除きし
事のことゆへ也明政の一途と為
すし、永井永原の存也

外

紅井の地記

四つ却本 江戸の名所を歎徒
して行状に便するもの文政四
年、真歎の序あり、此を古
と稱ふるも、今特く古本を作つ
て珍を披をらすものあり、之を
ハ原を也

大ぬき

三味線の譜を叙述するもの
二三枚の巻を挿む、元禄頃の
版あり、小林政成の花記あり、此
を今と稱歎のものとす

勲賞書

菊蔭を式文嬉の者也とん
七六珠也

のち抄る屋中のこととす、と近頃田人こそ帖を
字をもと書ゆを雪ありてあり、中川柳の之を聴き
るのち作ると帖を、余に徴す、即ちせり、
今日清書は、東の、屋にて観る、全

部編会諸師の巻首の種考の時と云ふ可
六枚の白紙詩也。此人の考不疎、酷似する詩も六
軒如、主を心し、画に不壞と云ふも、瑞光と云ふも
凡勢あり、才一画、護良親王土座、二福村崎、三大
佛四山、是古樹、上古、從滑川六七里、流、此内
大佛の上頭、半面を畫し、了、了、好、也、是、の、今
左の二三の功を稱す
十二月十九日

宋風舍利殿素樸無金瓊、我獨受古
免如兒水墨圓
室山に元霜、紺宇秋、更雨、寐、冥、少、行人
幽、齋、出、林、木
邱上大愚、閻佛身三十八、獻、鐙、拜、慈、願

在鹿金菴焚

冬禪人已帰、日暮、寐、巖、礎、天、地、無、一、風
山木、氷、入、定
三、面、山、如、屏、泉、湧、而、石、白、道、是、不、道、也
已、心、画、中、空
田、光、与、建、長、法、鐙、今、在、昔、空、觀、見、根、底、深
山、門、古、松、柏
栲、櫨、有、青、出、為、見、滑、川、橫、石、穿、沙、流、上
長、為、古、徳、也
誓、心、鑄、人、山、山、觀、心、轉、云、廟、英、聖、也
可、把、金、瓊、燭、相、如

久しく傳目には
用事にて一月
後し年々此末
取方深定ま
刻りし少し
あり

考しと之の
閣下に
まよ板の
今夕は
其
十二

一
田
二
三

久しくは目にこぼるるを以て
用事にて一月一令を以て
此本帝部は先
取方深き者にて命にて
刺すに命にて試に
あつては命にて試に
いかに命にて試に

考とては一考
関下にに
まよ板の付りに
今夕は芝は有眉の
十二月十日
本城の
子丈
新

保草園用箋



余評ハ朝即を引紙手筒と添え枚額を
贈ふ、良寛者集字ハ我修の二字刻し
ありハ朝つらし余の紙に添ふモウト
しを採知し、こゑを必りりうと見え、我修
の二字古雅拙き、之に交り兼中し也
十二月十日の記

○余ハ人高橋雲峰の為人も愛し、以年其畫
二三を贈ふ、今の又淺峰山ハ一幅と添ふ其
リ美らものあり、例のこゝろ、拙き、而も一程の
款を宛め、桂山君款をいふ、○河内守也雲
刻の雲峰の印を指す、晩年の他筆に似
リ、送しと云々

絶聖の云々錦綉疎杉陽和奏
の生り人

○前月早稲田の友人余の以えん是所の祝之を借
て以来相傳へ去る十八のうら、圓古坊、堀屋の友人亦
曰く、是をうら、此紙亦余の家、一紙、又ある也、故
の友人おん、一曰、此、もをわす、圓古坊、堀屋の
家、あるも、余、圓古坊、味と云々、一、九の、切の
し、し、味、め、を、圓古坊、ある、こと、を、言、い、自、高、壽、を
あ、す、と、せ、月、圓古坊、の、う、ら、こ、
七の、偶、と、死、を、が、華、甲、に、を、し、を、得、る、曰、味
る、詠、人の、投、擲、其、つ、る、力、あ、う、を、と、云、ふ、一、撰、稿、を
あ、う、北、の、徳、河、流、新、く、く、と、祝、辭、あ、う、支、那、料、地

の興に飽く。即ち前記の如く、門生松久、人野
地の名を著し、勞田野を編輯し、在りし其の
りしが、松久の如くし、石塚、松木、松井の三人、然し出
来し、主客十三人、以て集り、其の如く、少教を
いふ、自今、其の如く、松久、松木、松井の如く、
くつろぎ、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
二回、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
余の如く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
前四年、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
二十二年、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
松久の如く、松久、松木、松井の如く、
松久の如く、松久、松木、松井の如く、

人生の如く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
二十二年の如く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
何れ早く志を立、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
やと悔むと説き、二十二年の如く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
書を著す、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
斯く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
九、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
松久の如く、松久、松木、松井の如く、
五、松久の如く、松久、松木、松井の如く、
松久の如く、松久、松木、松井の如く、
三人の如く、松久の如く、松久、松木、松井の如く、

説を述べて人々を驚かす。自ら進んで余の性
行を仔細と評し、その流石に余を驚かすものなり
才を山不^一余を^一録つうしめさう。山田
清也^一が滅多に説を述べてそのなるに、
まことに極めを對却の言をもちり、同じ自分も
世内先生をも望の教育を授けさう、而して先生
らしう横の教を授けさう、自分の今も
少佐室の能あるを先生のお蔭さうと云ひ、先
生の壽を祝するものも先生のお夫人の内助を
忘る可らずと、向に然り、あつたは、向子を判
するも体を得るゝのあつた、余に實に向子を
不の^一山田の流石に之れに對して、

持余の向子に、あつたを云く、他に種々の
に、徳を有し、人々二三あつた、往く、
と、誤り、あつた、態、親の向物を、
解し、あつた、若しと、由り、余を、
め、^全自分の経歴を、ゆる、
致味、も、あつた、ある、
味、あつた、は、
ん、^全人、を、
文、^全約、
難、
言、
き、

たり

(十二月二十日録)

此折手ありし得ざるを道徳候へし物に努む田舎あ
野の関不倉おらんと紐切の電報を言のをん
たり

○今日の午後高向と共に大隈侯夫妻と訪のを奥へ
通る夫人撤志幕上へあり、候を辱る人と者
み例のことく之氣ありて読まむ其由は一秘あせ
く

侯曰く此は妻を芝居うてゆる山縣を辭
表を呈し候。此芝居を打拂つは山縣の辭
表を松方より内大佐の辭表を云せしめんと
仕込んば、然るも聽許しなむぬ山あひ

此期うしゆついにそのり、山縣其きうにあらう由
大佐の格手、候と松方を懸け、其點を呈すに
う乾分平田東助を撰え人と候。まゝ、汲
り、これと大分前うのり、當らんと西
寺を以て此を撰えんと候。なるや西
園寺の方辭し、候と、松方より候をん
く今之自ら辭表を出し、松方より候をん
とありし、候と

元今朝、高向の山縣を松方殿に辭書退、就
ての留書中、大隈侯の讀まう、子也(二十日)
○東本乳寺法主大谷光勝と現法主光演の祖
父光基の父也、光勝印執味あり、其花す、その

印見ふべきものあり、往年、初月、印譜を伝へ世
に行之、廿七亦一本とあり、偶々今日坊方に益中
を集印、大本三冊を購ふ、これ元勝の私印
を毀後、搦して謗を乞ひ、記念に領らざるもの也、余
の初めを思ふも也、私印、三島、井雲、櫻木の字、刻
こ成るものあり、多々、思ふもの、是るもの、若くは
唯此、徳と名人の刻、傳る、遊、印とを文也、此部
類、と珍とす、べきもの、若くは、乃ち、購ふ、之、架、
し、四、五、と、あり、

此の又、高、崎、千、五、郎、の、海、老、古、國、經、記、(一)又
ち、具、(一)冊、若くは、中、道、凡、の、徳、名、紙、を
模、刻、し、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、と、あり

之所のもの也、是、凡、の、徳、名、紙、を、模、刻、し、一、冊、を、購、
ふ、之、え、以、て、多、く、稀、と、あり、
歸、す、之、を、散、逸、を、傳、せ、一、部、に、收、め、
る、もの、こと、田、中、親、美、の、模、刻、を、傳、
ひ、今、日、は、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、
と、あり、之、を、傳、せ、一、部、に、收、め、

大正九年十一月廿三日

是、れ、を、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、
と、あり、
お、の、神、嘉、納、の、書、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、
と、あり、
ハ、二、十、年、前、の、書、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、
と、あり、
寺、山、家、木、と、し、一、冊、を、購、ふ、之、え、以、て、多、く、稀、
と、あり、
之、を、傳、せ、一、部、に、收、め、

稀きんさほどの統を可しなれといつた波の
かぬきもあつた神をうら良き更を別して子に
れいやくちええも塚木の原心うら胡粉を
用ひたるをよてゆら洗ひ花に縁ちも入
んたものうら不平路を千切三の道しる
ところといひ竟忠こころ額を二面をつく
くしめ他の一雨と燭籠の二言にあらし
とよと道違ふはききも不此店も
よやみ指しうらほのよゆ及ひ片うら
こころ燭籠のうらあしうらあつてうら
とれうらあつてうら何のぬ柿念も
かめうらうら

今年の暑や体もはげしく二十一年目え
塚木をゆひと眼刺のことろを他乾政の
塚木のゆひたる海を押しあけを三尺を
のふちえうらうら四五鉢の植木鉢の一
つを指しをうらうらうらうらあつて
記曉もうらうらやせのうらうら塚木回二十年
前ええのれうらうらをこきまの毎に帯口を
指し置るうらうらうらうらうらうらうら
くのぬしうらうらうらうらうらうら
て昔のぬしうらうらうらうらうらうら
とぬらうらうらうらうらうらうら
まめをうらうらうらうらうらうら

路しをりてし

○十二月廿五日 昔南唐松澄法師帖摹本を
購ふ。此の原帖を羅振玉の舊藏と傳う後
澄改の大西行禮に傳ふ。羅大痴氏余の知人を
いふ原帖を未だ此の紙の換を得ず。大改の場
又亦其の換帖を作らざる由をゆゑとす。此
の又年入るに毛筆を、今も如くは坊間こ
部と購ふを得たり。此帖を支那も稀画の
中の一と大東備に三あるに過ぎず。其内の一
を大西の母萬氏の筆を授けし羅の刻畫
を考へたあはれ祖帖高の紙を余に授け、宋松改
に人言に在ることありし。況んや唐松をや。吾邦

人往來唐松を見しことありし故に其の面目の
異なるを見し或は疑ひ或は異ふものあり。之れも
ともし其も也。支那の名家と名も或は此帖を
疑ふものありし也。兎角祖帖の研究を此
稀画有のもの世に出る。然る後為すを得
べし。羅氏の細説帖尾にあり就て又云ふ
と云ふ

○この余の還唐の途に來るべくして唐のありし
分を得たりし。楷書のか合録しゆらし本を細画
到其間もたうと三紙とに紙綴子に全紙を壽字
を縫し了。府市園を掲する。余が余を壽字
この説も也。今も唐に會して儀礼に倣ふ。

毒鏡巾を戴くを厭ひ回宮男に此習例あるを排
し、而して今之虎のやれを考へ終に其厚意
を考へざる能ひず所謂勢徳と虎を隠し得
たるもの一ツ天すべし

余の家庭の世話を交けたる勢徳の望ん大江
江部を家あり即ち是より意歴言の主徳者
より余のありの世八万田を譲りて余に記
念名を贈らん計畫中にして石塚を以て内披
家あり余南初と之れを世としはるも今こそ
人の之れを拒む能はずとある

十二月廿三日記

○早相神樂江巻石来訪、過日揮直毛を伝託せし

不盡帖を懐きて拂り出して同く、小名前を不得手
より殊に志さし、嗚とありては業、経撰るるが
ちをよのし出すをえんば、四君子例のことと、氣款
生動、中々五枚、直に山形一回あり、尤七余りの表
に過あり、余厚く謝して酒次、二十金を與ふ、山形
に題する時云

石能道義濟斯民深愧千秋渭其萃
便有放牧野聲の清時甘心画中人
又巻頭の題云云

都々若々蒲あゝの輪因

也、身出畫世、大い、道境を免る長ふへし
北の市中に散果、古押講七冊を購ふ心

徳年方松崎秋之の著す所、花押書ありて多
流布すんも此の甚稀也

中村蘭其の遺印荒干を収めし二冊本
此念の如く門下の人物も同好に傾つる者
あつたの記ををるる、選擇精を瀧の
感あり

十二月二十日記

〇十二月廿日又逸書の如く、
判りしものさく、

東野遺稿

三冊合二冊

寛延二年五月版 初編五二

今頃の書かゝるやうに、
乃ら珍るる也

梅辻春雄、
の次は、
あま

末三編

とまふ二冊也

顔立二卿墨蹟

瑠璃所 古改時文書

北帖 魚腹孤奈と書す

羅振玉珍存顔立肉書、
羅氏の後、
余を其の肉を

得新、今其の撰をいそいで、其方禁帯を味あ、
 ろのの真法無き、然り、其御の心を宗
 祖より、其の心を、いふ如く、其の心を、
 親しく、其の心を、いふ如く、其の心を、
 此者の物を、いふ如く、其の心を、
 入るを、いふ如く、其の心を、
 此ののぬる、いふ如く、其の心を、
 今の新の、いふ如く、其の心を、
 傳ふ、いふ如く、其の心を、
 一、いふ如く、其の心を、
 と、いふ如く、其の心を、

井寺録

日本酒の小酌は
簡易な民間治療

飲兵衛の子に遺す害も
新學術では認めてない

◇佐伯博士の發表

日頃の 習慣を漏らすと
 酒の癡癡研究所長佐伯博士は、
 近來の我が禁酒運動に對し、禁酒に
 必要の意見を表明した、手具を挽
 いてお正月を待ち構へて居る上戸
 黨は喜ぶ給へ、博士の説は斯う
 である——從來酒は毒作用から
 麻痺作用を起すと言はれたが、醫學
 説では毒作用を全く否定し、只抑
 制中樞を麻痺さすのみであるとな
 つた酒を飲んで

概念の 下に主張して
 居たのかも知れない、好い事を聞
 いた、男は云つて居た、日本酒の
 の害に關しては未だ我々界で
 研究された事はない、加之前述
 の如く日本酒は家庭に於て酒に
 依つて憂を晴らすと云ふ風に、
 微な精神病の預防になつて居
 る、簡易なる民間治療をして居
 ると云ふ事が出来るのである、
 尙飲酒の子孫に對し遺す害に關

此を以てすれば社會事業として
 酒を禁ずる事は無必要であ
 るが、禁酒禁酒を唱へる事は寧ろ
 反對を表明せざるを得ない、
 現に歐米の學界では酒は食物な
 り、若し食物の問題が起つた事があ
 る、若し食物を認めても一般食
 物と同程度を過せば毒があるの
 みならず、酒に於ては度を過せば
 藥物的作用を起すやうになり抑
 制中樞麻痺と云ふ事取りて、
 は必要だが禁酒の必要はないの
 である

口先は、いふ如く、其の心を、
 を、いふ如く、其の心を、
 是、いふ如く、其の心を、
 吟、いふ如く、其の心を、
 福、いふ如く、其の心を、
 配、いふ如く、其の心を、
 手、いふ如く、其の心を、
 報、いふ如く、其の心を、
 取、いふ如く、其の心を、
 恐、いふ如く、其の心を、
 有、いふ如く、其の心を、
 二、いふ如く、其の心を、

去つたをいふも如くも悲劇か其れをいふにこのい
ふは早稲田の出版部むの表紙の横切を弄
し、~~書~~慰勞に石をいふと酒や糸糸をいふと牛
の支店に出入りしをいふと金入り、銀のし千傳
をやつてやり、~~書~~米まきりいふに其れは先七
角を全部元出して返つて十年たるといふ喜劇
といふと一笑しん

(十二月廿七日)

墨法集要

一冊

武英殿取次珍版也此の洪武沈徳孫著す所也
墨の如き法往路も二十項に合つて説き二十圖を附

す物も法沈の宝版に出るなり也沈曰く墨法純家
皆難取墨工之言非身歴乎試文具而已不足憑也
聊舉其一以明之本手延珪之墨至宣和間黃金可得而
李墨不可得矣為世所貴如此其方秘密世無知者謬
乃妄撰之用教藥灰汁銚魚膠和松煤為之大可笑
也果可信而可從乎余初製墨時諸方並試之用藥
愈多而墨愈劣其後受教于三衢之墨師乃並去藥
惟膠煙細和熟杵之墨成色黑而亮真所謂如小兒目
睛也沈の制墨之由代支那の墨法家の事と
す所也余此書を得んとす年あり今架中
感たるといふをいふことあり十二月廿七日
○紛々たる早稲田の贈答漸やくりり舊債略々償

ひ得て雙肩初め之軒きをも免ぬ、偶々友人をも岐平
 長良川の香魚を精清のしるをも贈る乃ち之れを
 下物として十割の前野の多内支那をも高ら^用
 贈る紙魚酒を試む陶州の快をも免ぬ^杯
 復^夜に就くとして大隈部をも使来り六一大瓶と
 贈り来り、い余る日取^り欲する特製衣の白鷹を
 先は贈るえり同し酒も持^ち来んとす、^二際し
 此物を得るを喜ぶ乃ち郷島をも^再贈り来り
 鞋の塩^りを割るなりして^五杯^一を免ぬ
 紙魚の酒^下も^一杯^一を免ぬ
 又及川さる也

十二月二十九日記



